

明末日用類書燈謎選集

呉, 修喆

<https://hdl.handle.net/2324/7343510>

出版情報 : pp.2-176, 2023-02-28. 文学通信
バージョン :
権利関係 : © 2023 Wu Xiuzhe



校訂・訳注

吳修喆

Wu Xiuzhe

明末日用類書燈謎選集



文学
通信

目次

はじめに	4
凡例	10
書句類	13
古文類	37
書名類	47
大明律類	55
官名類	61
地名類	67
人名類	73
詩・詞・曲類	81
曲牌類	97
骨牌名類	105
字謎類	109
俗語類	129
事物名類	137
謎底リスト	167

はじめに

二〇二二年九月二三日から十一月二〇日、日中友好会館美術館において「『珠璧交輝』清代木版年画＋UKIYO-E」という展示が行われた。筆者がその展示に気付いたのは、東方書店の公式ツイッターアカウントによる一つのリツイートを見かけたからである。そこには、清代木版年画「暖香塢試製春燈謎」の一部を拡大した画像が貼られており、「この行燈に書かれたなぞなぞの答えはなんなんだ？」とクイズが出されている。^[1]

その謎には見覚えがある。ただ、年画のタイトルに反して、『紅樓夢』第五十回「蘆雪庭に争って即景詩を聯ね、暖香塢に雅やかに春燈謎を製る」に出てくるものではなくて、ひいては、ほかの回に見られる燈謎でもない。^[2]端的に言えば、『紅樓夢』とは無関係である。その後、展示図録を入手し、公式ツイッターに挙げられている当該年画の全体図をもとに、そこに入っている燈謎をすべて探し出してみた（画像の右から左。「」は年画上にないが、日用類書所載燈謎を参照に補った文字。明らかな誤字は（ ）内で訂正した。後ろの数字は本書における掲載番号である）。

〈天井の燈籠〉

- | | | |
|----------|-------|----|
| ①問得清白無仇屈 | 打大明律語 | 89 |
| ②自家夫配自家妻 | 打大明律語 | 89 |
| ③撇了爹娘去做官 | 打大明律語 | 90 |

〈扉・壁〉

④位在万人之「上」 202

⑤五（吾）児之子有施為 打一古人名 113

⑥孩児今夜必然生 打一古人名 123

⑦四朝落地就能行 打一古人名 123

⑧世間田地都占了 打一古人名 124

⑨立在「一人之下」 202

〈卓上の燈籠〉

⑩蟾宮一口小明塘 一枝鉄箭射南方

二十四条花巷走 巷々能会做文章

打一使物 277

⑪人 打一「二カ」 薬名（出処未定）

⑫三人同日去観花 百友元来共一家

禾火二人相对坐 夕陽橋下一双瓜

打四字 198

へ人物が手に持っている燈籠・紙

⑬従今一去不回 打一菓名 252

⑭師生終日商量事 打四書一名 73

⑮三十歳後始読書 生来半百万始学

打四書二名 73

結果はこのとおり、全一五題のうち一四題が明末日用類書に収録されている。図録の解説によると、この年画自体は清嘉慶年間（一七九六—一八二〇）に天津楊柳青に製作されたものである。この事実から、明代流行りの燈謎は少なくとも清中葉まで民衆の日常生活に深く浸透していたことがわかる。

日中友好会館美術館がクイズとしてツイッターにあげたのは、この中の⑫番、「春夏秋冬」の四文字を当てる字謎詩である。この一作が選ばれた理由は右に記した全一五題を見れば察せるのであろう。おそらく、単に文字が鮮明に残っているからではなくて、謎を解くために必要な背景知識が今日においても日中両国間で広く共有されているからではないだろうか。

実は、昨年だけでこの謎とは三回遭遇した。既述の木版年画以外に、資料収集で新たに得た情報をここで紹介しておきたい。

その一つは龍谷大学写字台文庫所蔵、都賀庭鐘編『近詩選』である。文化元年（一八〇四）三月に大坂の定學堂より刊行されたこの本には、字謎詩が四首（本書195・192・172・198番と同じもの）入っており、そのうち一首がすなわちこの「春夏秋冬」の謎である。序文にある「高調雖佳、非所以弘斯文。今也不論世与人、拔其近浅而訓詰于傍、蒙学如可至也（高調佳なりといえど、斯文を弘むる所以にあらず。今や世と人を論ぜず、その近浅なるを抜きて傍

に訓誥し、蒙学如しには至る可しなり」ということばから、タイトルの「近詩」は「近浅な詩」という意味であることがわかる。編者である都賀庭鐘（一七一八—一七九四）は、初期読本作者として名高い。彼が残した読書筆記『過目抄』には、数多な漢籍から得た豊富な教養が詰まっている。^[3]『過目抄』の抄録書目一覽には入っていないが、都賀庭鐘も江戸に持ち渡された日用類書、あるいは当時の漢籍謎集を読んでいた可能性は十分にある。たとえば、向井富編「商舶載来書目」に、享保十二年（一七二七）に『一夕話』一部六本、『又一夕話』一部五本が日本に持ち渡された記録が残っている。^[5]『一夕話』と『又一夕話』は清代において繰り返し翻刻されていた咄咄夫による雑文選集であり、『一夕話』の第五巻には計二〇〇題前後（版本によって増減する）の「雅謎」が収録されている。『近詩選』に採録された四首中の三首（本書192・195・198番）もそこに含まれる。

もう一つは、小宮山楓軒（一七六四—一八四〇）の筆録『楓軒偶記』に見られる「銚子浦漂着清人の書」である。そこには文化四年（嘉慶二年＝一八〇七）に日本に漂着した中国人が書いた詩文が記されている。^[6]内容は宋代の『神童詩』や『山村詠懷』から、元曲『琵琶記』の科白、清初の才子佳人小説『平山冷燕』に書かれている詩などにわたり、そのうち、福州出身の林朝文が書いたのは、まさにこの「春夏秋冬」の字謎詩である。江戸期において、中国からの漂着船（唐船）の乗組員と筆談役を務めた日本儒者の間に、お互いの関心事を聞く「筆語」や漢詩文による応酬がしばしばあった。^[7]「銚子浦漂着清人の書」も乗組員が日本に残した文化交流のあかしだと推測できる。

以上二点の資料より二、三十年ほど遅れて、江戸の雑学者山崎美成（一七九六—一八五六）は、『近詩選』から「極字詩謎」（本書195番）を自身の考証随筆『海録』巻十二「一七・謎第二」に抄録しただけでなく、同じ条の頭注に、文政九年（一八二六）春に中国寧波から遠州清水港に漂着した得泰船の船主と代官羽倉氏の間で行った「清水水

清^し「寧波波寧^{なみしずか}」という対句のかけあいをも記した。^[8]さらに、美成は滝沢馬琴、山崎北峰らが発起した兎園会で「隠語^{かくしことば}」を披露し、そこで中国の隠語や謎語などを『猜彙^{さい}』に抄録してあると言及した。^[9]

先月、国立国会図書館の古典籍資料室で、わたしはついに『猜彙』と題されるその手記と対面したのである。まるで一本の細い糸をたどって手繰り寄せたこれらの資料に、一種の奇妙な懐かしさを覚える。

中国では、清末以降、精緻化した「今体謎」が謎人によって大量に創作され、明末日用類書に収録されている「古体謎」はやがて淘汰され、忘れ去られた。願わくは、拙著『燈謎——漢字文化圏文字遊戲の諸相^{すがた}』の副読本として作成した本書をきっかけに、燈謎のプロトタイプともいえるこれらの作品をより多くの人に触れてほしい。決して華麗な文芸ではない、まだそのような文芸になろうともしなかった、浅近で、学童向けのもの。日常生活の片隅に根付いたちょっとした知的な遊び。それでも、たしかに海を渡ってきた、時を越えてきた謎たちである。

二〇二三年二月

呉 修喆

[1] https://twitter.com/JCFC_Museum/status/1578933804986957824 <https://pbs.twimg.com/media/Fd8vgvBaMAFVcqZ?format=jpg&name=large> (最終閲覧：二〇二三年二月一三日)、展示図録『日中国交正常化五〇周年記念展「珠璧交輝——清代木版年画＋UKIYO-E」』公益財団法人日中友好会館、二〇二二年九月二二日。

- [2] 『紅樓夢』に書かれている燈謎については、『燈謎——漢字文化圏文字遊戲の諸相』第三章第二節（文学通信、二〇二三年二月、八二—九五頁）を参照されたい。
- [3] 木越治「本を楽しむ都賀庭鐘の読書筆記『過目抄』のことなど」『書物学 = Bibliology』2、勉誠出版、二〇一四年五月、五五—五九頁。
- [4] 劉菲菲『都賀庭鐘における漢籍受容の研究…初期読本の成立』、和泉書院、二〇二一年三月、二二—一二二頁。
- [5] 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、一九六七年、六六〇頁。
- [6] 国書刊行会編『百家随筆第二』、国書刊行会、一九一七年十月、一三三—一三四頁。
- [7] 大庭脩『漂着船物語…江戸時代の日中交流』、岩波書店、二〇〇一年八月、二二七—二二九頁。
- [8] もとの記録は羽倉簡堂『清水筆語』（国文学研究資料館所蔵「IIF Discovery in Japan 収録」https://cultural.jp/item/iifman-kotenseki-nijl-ac_biblio_200020264）による。
- [9] 滝沢馬琴『兎園小説』、日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第一巻、日本随筆大成刊行会、一九二八年四月、三三頁。また、山崎美成『三養雜記』「字謎」条にも「予かつて、和漢の字謎、離合詩、隱語の類を集め二巻とし猜彙と名づく」との割注がある。日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第三巻、日本随筆大成刊行会、一九二八年七月、五一〇頁。

凡例

・校訂に使用した底本およびその略記は以下のとおりである。文字が著しく摩損したものや謎底が記されていない四題以外はすべて収録した。

- ①【三台】『三台万用正宗』四三卷、万曆二十七年（一五九九）福建建陽三台館・双峰堂余象斗刊本（坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、二〇〇〇年十一月）
- ②【燕台】『新鐫燕台校正天下通行文林聚宝万卷星羅』三九卷、万曆二十八年（一六〇〇）江西撫州徐會瀛編輯、福建建陽書林静觀室詹聖謨刊本（北京図書館古籍出版編輯組編「北京図書館古籍珍本叢刊」第七六、北京：書目文獻出版社、一九八八年）
- ③【万用】『万用正宗不求人』三五卷、万曆三十七年（一六〇九）刊本（坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、二〇〇三年五月―七月）
- ④【万書】『万書淵海』三七卷、万曆三十八年（一六一〇）刊本（坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、二〇〇一年二月―四月）
- ⑤【妙錦】『妙錦万宝全書』三八卷、万曆四〇年（一六一二）福建建陽安正堂劉双松刊本（坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、二〇〇三年九月―二〇〇四年一〇月）
- ⑥【竜頭】『鼎鐫竜頭一覽学海不求人』二二卷、刊行年と出処は不明、目錄欠、闕卷九、一三（東京大学東洋文化研究所仁井田文庫所蔵）

- ⑦【新裁】『新刻鄴架新裁万宝全書』三四卷、万曆四二年（一六一四）刊本（東京大学東洋文化研究所仁井田文庫所蔵）
 - ⑧【五車】『五車万宝全書』三四卷、万曆四二年（一六一四）江西南昌徐企龍編輯、福建建陽存仁堂・樹德堂刊本（坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、二〇〇一年六月—十一月）
 - ⑨【探精】『新刻艾先生天祿閣彙編探精便覽万宝全書』三七、崇禎元年（一六二八）刊本（東京大学東洋文化研究所仁井田文庫所蔵）
- ・本書では、必要に応じて一部旧字体も使用するが、読みやすさを考慮して、引用文中の漢字は原則として新字体を使用した。Unicode 外の文字は、原則として普通の活字に改めた。文書の破損等で判読が困難な場合は、字数を推定し□□のように示した。推測した文字は「」に入れた。
 - ・謎底となる漢文の通釈は、おもに新釈漢文大系（明治書院）を参考にした。既訳のないものは筆者による現代語訳である。
 - ・傍線で異文の箇所を示した。底本の割注や明らかな誤字の訂正は（ ）で示した。「」は訳者によるもので、語義を明確化するために注記・注釈を施す際に用いた。
 - ・本来日用類書に収録されている燈謎は謎目（謎の種目。答えの範囲を示すもの）の表記がない。本書では、日用類書における燈謎の分類をもとに、謎目を適宜補った。
 - ・本書はJSPS 科学研究費補助事業若手研究21K12940「日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研究」（研究代表者：呉修テツ）の成果の一部である。

・データ整理・入力アシスタント：陳迪、叶雪琚

【書句類】

1

詠張良 三台

留侯輔漢君 運籌帷幄中

廷諍皆忠直 君王尽樂從

仁恩布天下 德愛播群工

為殺淮陰輩 投簪伴赤松

四書二句

諫行言聽 膏沢下於民 有故而去

《詠》留侯〔張良〕は漢君〔劉邦〕を補佐し、後方で戰略を立てた。朝廷で發する忠言はみな率直であり、君王はそれらをすべて喜んで聞き入れた。彼の仁恩は天下に行き渡り、德愛は群臣に広がった。淮陰輩〔韓信〕を討伐したため、官位を捨てて赤松子〔神仙道術〕の道に入った。

謎底…臣下の諫は君に取り上げられてよく行なわれ、進言はよく聴かれ、その恩恵は人民に下り、あまねく行き渡ったが、わけがあつてその臣下は

2

譏古 三台

梁惠王麋乱其民 臧文仲山節居蔡

管夷吾亦樹塞門 楚陳相反背其師

四書二句

不仁不智 無礼無義

その国を去らねばならない。

《註》謎底は『孟子・離婁章句下』による。第一・二句（首聯）で「諫行」、第三・四句（頷聯）で「言聽」、第五・六句（頸聯）で「膏沢下於民」、第七・八句（尾聯）で「有故而去」をそれぞれ連想したものである。

《詠》梁惠王は民を疲弊させ「不仁」、臧文仲は柱の枅形を山の形に彫り、占いの龜を貯めた「不智」。管夷吾〔管仲〕も門の内側に屏を立て「無礼」、楚国と陳国はその盟約を破った「無義」。

《註》謎底は『孟子・公孫丑章句上』による。文意の連想で解く。

3

嘆世 三台

涓々逝水従東去 相接相承不斷頭

田園阡陌皆枯槁 百姓惟懷死喪愁

四書一句

流連荒亡

【燕台】 【妙錦】 【竜頭】 【新裁】 〈同〉

《訳》細々とした川は東へ流れ「流」、切れることなく次から次へと流れていく「連」。田地もあぜ道もみな枯れ果て「荒」、民は死の絶望を抱えるしかなかった「亡」。

謎底…家に帰らないで、酒食や遊興にふける。

《註》謎底は『孟子・梁惠王章句下』による。各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字

4

隱遁 三台

臣賢君聖樂時雍 獻策長門入帝宮

主若荒淫貪酒色 解組歸來隱跡踪

四書二句

治則進 乱則退

《訳》賢臣聖君による太平を享受するときは、策を献じ朝廷に入る。君主が酒色にふけているならば、官吏を辞めて帰郷し姿を消す。

謎底…世が治まれば政治の道を進み、世が乱ればその地位から退く。

《註》謎底は『孟子・万章章句下』による。文意の連想で解く。

5

憶古 三台

箕子当年佐紂王 見紂無道自悲復
只因屢諫遭囚獄 後來披髮自佯狂

四書二句

事君数 斯辱矣

《訳》箕子が紂王を補佐していたころ、紂王の無道さを目の当たりにし、悲痛な念を抱いた。諫めたことで牢獄に入れられたことがしばしばあり、後に狂乱の姿となってしまった。

謎底…君に事えてあまりしつこくすると、却って軽んじ侮られることになる。

《註》謎底は『論語・里仁第四』による。文意の連想で解く。

6

臣職 三台

出入禁闥輔昭宣 進止殿廷豈越班

安桀造謀声誅媚 免冠待罪実為難

四書二句

事君尽礼 人以為諂也

《訳》朝廷に出入りするのは王を補佐するためであり、どうして僭越な行為になるのか。媚び諂っているなどあらぬ疑いをかけられ、むりやり謝罪させられて実に困惑している。

謎底…君に事えては臣たるものの礼を尽くすのは当然のことなのに、世間の人は、あれは君の寵愛を得んがために、媚び諂うのだという。

《註》謎底は『論語・八佾第三』による。文意の連想で解く。

7

嘆時事 三台

一個孤鴻帶箭来

老翁病篤留些氣 ^①

嘹々唳々過樓頭

口中還說要修行 ^②

四書四句

鳥之將死 其鳴也哀
人之將死 其言也善

①【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】無多氣、

【万用】【万書】【探精】無氣力

②【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【万用】

【万書】【探精】念釈消災

《訳》矢に刺されている大きな鳥が一羽飛んでき
て、痛ましく甲高い鳴き声をしながら楼閣の上を
飛んでいった。危篤な老人は幾ばくも無い命で、
修行に出たいと言っている。

謎底…鳥がまさに死にそうなとき、その鳴き声は
哀しい。人がまさに死にそうなとき、その言葉は
善である。

《註》謎底は『論語・泰伯第八』による。文意の
連想で解く。

8 有感 三台

捉得^①魚兒活澆鮮 佳人不肯^②下油煎
聴得厨中刀砧響 情願長斎繡仏前^③

四書四句

見其生 不忍見其死
聞其声 不忍食其肉

①【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】我視

②【燕台】囑婦切莫、【妙錦】【竜頭】【新裁】【五
車】囑婦勿把

③【燕台】【竜頭】【新裁】【五車】献仏前、【妙錦】
献神前

《訳》新鮮な魚を獲ってきたが、佳人はそれを焼
こうとしない。厨の中で包丁とまな板の音を聞く
より、刺繍された仏画の前で修行したほうがまし
である。

謎底…生きた姿を実際に見ては、それが死ぬのを

9

蝶恋花詞 三台

軍人農父共屯田 器也周全糧也周全^①

言孚德惠已多年^② 老也懷恩^③ 少也懷恩^③

四書二句

足食足兵 民信之矣

①【万用】【万書】軍黎雜処号屯田 戈甲周全饋

餉周全

②【万用】【万書】百姓中孚已有年

③【万用】歸恩、【万書】思歸、【妙錦】懷恩

《詠》駐屯兵と農民がともに耕作し、兵器も食料

10

譏世 三台

余丁数煩惱 煩惱運限倒

煩惱上司来 煩惱夫子説不好

四書四句

君子有三畏 畏天命 畏大人

畏聖人之言

《詠》軍役を免れた男が自らの煩惱を挙げる。ひとつに運命の不順、ふたつに高官の到来、三つに夫子の言葉をうまく解説できないこと。

見るのは堪えられないものである。その声を聞いては、その肉を食べるに忍びないものである。《註》第四句は杜甫「飲中八仙歌」の「蘇晋長齋續仏前」を取り入れたと思われる。謎底は『孟子・梁惠王章句上』による。文意の連想で解く。

も充足している。統治者の言葉は信用できて、徳も厚く、老若問わずその恩を感謝している。謎底…食を満足させ、軍備が充足し、人民に信義あらしめる。《註》謎底は『論語・顔淵第十二』による。文意の連想で解く。

誚世 三台

謎底…君子に三つの畏れ敬うことがある。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏れ敬う。

《註》謎底は『論語・季氏第十六』による。文意の連想で解く。

黄昏瞎子阻長途 文公名說憶当初

記得当初挽耍日 乾坤高掛斷人扶

四書序四句

晦盲否塞 熹自早歲

為兒嬉戲 天地懸隔

《訳》夕暮れのとくに、盲者が道中で立ち往生する。

文公〔朱熹〕は昔を懐かしく話した。遊んでいた過去の日々を思い出す。天は地上高く掲げ、人間の支えなど要らない。

謎底…世の中が乱れ暗く、物事が滞って進まない。

對聯 三台

熹、早年より。こどもの時の遊び。天と地のようにかけ離れている。

《註》謎底の四句はそれぞれ『大学章句序』『中庸章句序』『論語序說』『孟子序說』による。文意の連想で解く。

巒峰秀麗靈芝喬樹長萌連

苑圃繁華瑞鶴仙羊棲止並

四書二句

草木生之 禽獸居之

《訳》山々の景色が美しく、靈芝と喬木は連綿と生い茂っている。庭や園圃は生氣が溢れており、吉兆となる鶴と羊がともに棲んでいる。

謎底…草木がここに生え、鳥獸がここに棲む。

《註》謎底は『中庸』による。文意の連想で解く。

13

勸学 三台

書勤学 書勤学 功夫務要相継続

自朝自暮莫暫離 心中自然多快足

四書二句

学而時習之 不亦悦乎

《訳》 勉学に励め、勉学に励め、終始たゆまず励め。

朝から晩まで一刻も勉強から離れるな。そうして

いれば、心の中は自ずと充足するのだ。

謎底…学んだことをいつも繰り返し習うのは、嬉

しいことではないか。

《註》 謎底は『論語・学而第一』による。文意の

連想で解く。

15

閑咏 三台

吹口氣塞於天地間

吸口氣斂跡而無形

四書序二句

放之則弥六合 卷之則退藏於密

擾害良民常不静 出沒之時不見形

四書一句

怪力乱神

《訳》 瓜の妖怪が現れて驚異な力を示す。千斤の

鼎も羽のように軽々と持ち上げた。民に害を及ぼ

しては騒動を起こす。出没する時は姿をくらます。

謎底…怪談、武勇伝、乱倫背徳のこと、鬼神靈驗

《註》 謎底は『論語・述而第七』による。各句の

文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字の謎

底にたどりつく形式の謎である。

14

瓜精 三台

瓜精一 出好驚人 拳鼎千斤若羽輕

《詁》息を吐けば、天地の間を充滿し、息を吸えば、足跡が隠され、姿が見えなくなる。
 謎底…放てば六合（天地四方）にわたり、巻いてしまえば秘密に退蔵される。
 《註》謎底は『中庸章句』による。文意の連想で解く。

【万用】

蒼穹日月每周旋 犯法何処堪躲蔵

大学書句

天運循環 無所逃罪

【万書】【妙錦】【新裁】【探精】〈同〉

【竜頭】【新裁】 蔵躲

《詁》蒼穹には太陽と月がつねに周旋する。法を

犯した人は身を隠す場所などない。
 謎底…天運の循環。罪の逃れようがない。
 《註》謎底は『大学章句序』によるが、連続の二句ではない。文意の連想で解く。

【万用】

論孟仍還在 難識其中意

大学書句

則其書雖存 而知者鮮矣

【万書】〈同〉、【探精】前句のみ

《詁》『論語』『孟子』は今もあるが、その意味を理解するのは難しい。

謎底…その書は伝存しているが、知る者は少ない。

《註》謎底は『大学章句序』による。文意の連想で解く。

18

【万用】

唐虞堯舜至今秋

大学書句

前王不忘

【万書】〈同〉

《訳》陶唐氏〔堯〕と有虞氏〔舜〕の聖名は今の

時代まで伝わってきた。

謎底…前王忘れられず。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

19

【万用】

朝々換着好衣裳

大学書句

日々新

20

【万用】

五人此夜共看見

大学書句

十目所視

【万書】【探精】〈同〉

《訳》毎朝違う良い服を着る。

謎底…日々新たに作る。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

21

【万用】

兩目俱盲難看物

双耳俱^①聾難見^②声

【万書】観

《訳》この夜、五人とも見た。

謎底…十目の見るところ

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

大学書句

視而不見 听而不聞

①【妙錦】【竜頭】【新裁】並

②【万書】聴、【探精】弁

《訳》両目とも視力を失い物が見えない。両耳とも聴力を失い音が聞こえない。

謎底…視れども見えず、聴けども聞こえず。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万用】

吃飯難弁甜与苦

大学書句

食而不知其味

【万書】〈同〉

《訳》食事をして甘味と苦味を判別できない。

謎底…食べてもその味を知らず。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万用】

墳墓中有何金銀

大学書句

亡人无以為宝

【万書】【探精】〈同〉

《訳》墓の中にはどのような金銀財宝があるのか。

謎底…亡人は宝とするものがない。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万用】

收動秋^①糧百姓去 放濟飢荒百姓^②来

大学書句

財聚則民散 財散則民聚

【万書】【妙錦】【竜頭】【探精】〈同〉

①【新裁】錢 ②【新裁】子民

《訳》秋の食糧をすべて徴収すれば民は去り、飢饉を救済すれば民は来る。

謎底…財聚まれば則ち民は離散する。財散すれば即ち民は聚まる。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

25

【万用】

今年産育這般多

大学書句

生之者衆

【万書】【探精】〈同〉

《訳》今年生まれたものはこれほど多い。

26

謎底…これを生ずる者多し。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万用】

纔病一場尤未了^① 又被賊盜劫錢^②財

大学書句

災害並至

【万書】〈同〉

①【妙錦】【竜頭】【新裁】好 ②【新裁】去

《訳》病み上がりでまだ完全に治ってないのに、盗賊に金を奪われた。

謎底…災害並びに至る。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

27

【万用】

世間若用孔夫子 定国安邦撫万民

中庸書句

以天下之大聖 行天下之大事

【万書】〈同〉

《訳》世の中は孔子を重用すれば、国は安定し万民は護られるのであろう。

謎底…天下の大聖をもって、天下の大事を行う。

《註》謎底は『中庸章句序』による。文意の連想で解く。

28

【万用】

不拘大小皆拿起

中庸書句

巨細畢拳

【万書】【探精】〈同〉

《訳》大小問わずすべて取り上げる。

29

謎底…巨細ことごとく拳がる。

《註》謎底は『中庸章句序』による。文意の連想で解く。

【万用】

吃了蜜糖甜不尽

中庸書句

其味無窮

【万書】【探精】〈同〉

《訳》蜜糖を食べたら口の中でいつまでも甘さを感じる。

謎底…その味窮まりなし。

《註》謎底は『中庸章句』による。文意の連想で解く。

30

【万用】

31

身被刀斬色如常 瞑目幽明無怨心

中庸書句

至死不変 死而不厭

【万書】〈同〉、【探精】前句のみ

《訳》刀に斬られても顔色一つ変わらない。目を瞑って生死をさまよっても怨む心を持たない。

謎底…死を辞さない。死ぬまで守り抜いて心をかえない。

《註》謎底は『中庸』によるが、連続の二句ではない。文意の連想で解く。

【万用】

莫听诽谤莫近人婦

中庸書句

去讒遠色

32

【万書】〈同〉

《訳》诽谤中傷に耳を貸さず、他人の妻に近づかない。

謎底…讒言を退き女色を遠ざける。

《註》謎底は『中庸』による。文意の連想で解く。

【万用】

不説你做賊 只説你念経

中庸書句

隱惡而揚善

【探精】謎面は前句のみ

《訳》あなたが盗賊だったことを言わずに、あなたが信心深く仏経を唱えたことばかり言いふらす。

謎底…悪いことを抑え、善いことを取り上げて広めた。

《註》謎底は『中庸』による。文意の連想で解く。

33

【万用】

世上惟有讀書高

論語書句

学而第一

【万書】【探精】〈同〉

《訳》世において品格の最も高い行為は勉学である。

《註》謎底は論語第一篇の見出しである。

34

【万用】

讀書刻々下功夫

論語書句

学而時習之

【万書】〈同〉

《訳》寸時たりとも勉学を怠らない。

謎底…学んだことをいつも繰り返し習う。

《註》謎底は『論語・学而第一』による。文意の連想で解く。

35

【万用】

畏程途之跋涉 学范蠡之泛舟

論語書句

道不行 乘桴浮於海

【万書】【妙錦】【竜頭】【探精】〈同〉

《訳》山川を跋涉するような苦しい長旅を畏れ、范蠡に学んで舟に乗った。

謎底…道の行われない世を避けるために、小さいいかだに乗って海上へでも出よう。

《註》謎底は『論語・公冶長第五』による。文意

の連想で解く。

36

【万用】

努力攻書不吃飯 歡々喜々無嗟嘆

論語書句

發憤忘食 樂以忘憂

【万書】〈同〉、【探精】前句のみ

《訳》一生懸命勉強して食事もせず、楽しく過して嘆くこともない。

謎底…発奮して食事を忘れ、喜び楽しんで心配事を忘れる。

《註》謎底は『論語・述而第七』による。文意の連想で解く。

37

【万用】

聴子説話皆歡喜

論語書句

於吾言無所不悅

【万書】【探精】〈同〉

《訳》あなたの言うことは、どれも聞いていて楽しい。

謎底…私の言うところをすぐ理解してしまっているばかりだ。

《註》謎底は『論語・先進第十一』による。文意の連想で解く。

38

【万用】

孝服満時件々帶

論語書句

去喪無所不佩

【万書】〈同〉

《訳》忌明けになったら〔装身具を〕全部身につける。

謎底…喪を服する以外の場合は〔装身具を〕身につけた。

《註》謎底は『論語・郷党第十』による。文意の連想で解く。

【万用】

若有千斤力 何愁百万兵

論語書句

勇者不惧

【万書】【探精】〈同〉

《訳》千斤を持ち上げる力があれば、百万の兵が

攻めてきても恐れる必要はない。

謎底…勇者は懼れることはない。

《註》謎底は『論語・憲問第十四』による。文意

の連想で解く。

【万用】

非因醉了昏昏睡

論語書句

不為酒困

【万書】〈同〉

《訳》ぐっすり眠っているのは酔ったからではない。

謎底…酒を飲みすぎて乱れ苦しむことをしない。

《註》謎底は『論語・子罕第九』による。文意の連想で解く。

【万用】

口如啞人難説話

論語書句

似不能言者

【万書】【探精】〈同〉

《訳》口のきけない人のように話すことは難しい。

謎底…口もきき得ないようにみえた。

《註》謎底は『論語・郷党第十』による。文意の連想で解く。

42

【万用】

位列朝班效諸葛鞠躬尽瘁

論語書句

事君能致其身

【万書】【探精】〈同〉

《訳》官吏に列し、諸葛のように身命をなげうつ

て奉公する。

謎底…君に事えては一身を捧げてはげむ。

43

【万用】

身沾塵沢慕陳雷以漆投膠

論語書句

与朋友交言而有信

【万書】【探精】〈同〉

《訳》体に付く塵と汗、陳重と雷義のような膠漆の交わりを敬慕する。

謎底…友だちと交わるに信義を重んじる。

《註》謎底は『論語・学而第一』による。文意の連想で解く。

44

【万用】

刀戟森々一戰易梟總兵首

英雄凛々万金難動一人心

論語書句

三軍可奪帥也

匹夫不可奪志也

【探精】〈同〉

【万書】都督

《訳》刀戟、森々として、一戦交われば総帥が梟首される。英雄、威風堂々して万金をあげてもその心を動かすのが難しい。

謎底…三軍も総大将を奪おうと思えば奪うことができる。一人の男でも、その人の志を奪い取ることはできない。

《註》謎底は『論語・子罕第九』による。文意の連想で解く。

45

【万用】

家務忙時命兒童而代力

殽儀設処請父母以同餐

論語書句

有事弟子服其勞 有酒食先生饌

【万書】【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》家事が忙しい時は子どもの力を借り、宴会を設けては両親を招待する。

謎底…骨の折れる仕事があれば、若者が引き受ける。ご馳走があったら、先に生まれた者に召し上がっていただく。

《註》謎底は『論語・為政第二』による。文意の連想で解く。

46

【万用】

炎蒸時候解煩惟用清泉

凜烈嵐光破睡必須熱水

論語書句

夏日則飲水 冬日則飲湯

【万書】【探精】〈同〉

《訳》蒸し暑い日のいらいらを慰めるのはもっぱら清い泉水であり、激しい風雪の中で眠気を覚ますのは必ず熱湯を用いよう。

謎底…夏の日には水を飲むが、冬の日にはお湯を飲む。

《註》謎底は『孟子・告子章句上』によるが、原文の順番は逆である。文意の連想で解く。

47

【万用】

若問人間愁苦事 人間愁苦不堪聞

県官昨夜賞花燈 到处頻聞鼓吹笙

孟子書句

憂民之憂者 民亦憂其憂

樂民之樂者 民亦樂其樂

【万書】【探精】〈同〉

《訳》世の中の憂いや苦しみを問えば、その憂苦は聞くに堪えられない。県官は昨夜飾り燈籠を見物し、至るところから頻りに鼓樂が鳴っていた。

謎底…民の憂いを憂う者は、民もまたその憂いを憂う。民の樂しみを樂しむ者は、民もまたその樂しみを樂しむ。

《註》謎底は『孟子・梁惠王章句下』によるが、原文の順番は逆である。文意の連想で解く。

48

【万用】

因殺孩兒起大軍

孟子書句

為其殺是童子而征之

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》 子どもを殺されたために大軍が招集された。

謎底…この子どもを殺したということのために、

〔湯王は葛伯を〕征伐した。

《註》 謎底は『孟子・滕文公章句下』による。文

意の連想で解く。

49

【万用】

行囲左右合方円

礼記二句

周旋中規 折旋中矩

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》 歩くのも回るのも左も右も方円に合う。

謎底…身を翻すときは正円を描くようであり、左

50

【万用】

近事淫多遠事攘

書経二句

内作色荒 外作禽荒

右に曲がるときは直角を描くようである。

《註》 謎底は『礼記・玉藻第十三』による。文意の連想で解く。

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》 身近な事に対してはだいたい節度なく放縱

になり、遠いところでは強奪など悪事をはたらく。

謎底…家の中では女色に惑い、外に出ては狩獵にふける。

《註》 謎底は『書経・五子之歌』による。文意の連想で解く。

51

【万用】

天養丈夫地養婦

易經二句

乾道成男 坤道成女

【万書】【探精】〈同〉

《訳》天は漢を養い、地は婦人を養う。

謎底…乾道は男を成し、坤道は女を成す。

《註》謎底は『易經・繫辭上伝』による。文意の連想で解く。

52

【万用】

上馬驟々步難行

詩經二句

陟彼崔嵬 我馬虺隤

【万書】【探精】〈同〉

《訳》すぐれた馬でも進みにくい。

謎底…彼の高き尾根に登れば、我が馬は疲れ果てる。

《註》謎底は『詩經・卷耳』による。文意の連想で解く。

【古文類】

53

上元 三台

元夕遶街嬉 全憑灯火輝
 燒尽銀蟬炬 住步且回帰

小学二句

夜行以燭 無燭即（則）止

【妙錦】【竜頭】〈同〉

《訳》元宵節の夜に市街を回って遊べるのは、燈籠の光があるからである。蟬燭が燃え尽きたら、外で歩くのをやめて帰ろう。

謎底…夜は必ず燭をもっていく。燭のない時は入ることをやめる。

《註》謎底は『小学・明倫第二・夫婦之別』による。文意の連想で解く。

聴他忠孝心懷妬 纔説淫奔到处伝

小学四句

惟楽戯語（談） 莫思古道

聞人之善疾（嫉）之

聞人之惡揚之

《訳》部屋の中で手を叩いて笑って話をし、昔の聖人の言葉を考えないで。他人の忠誠と親孝行を聞いたら嫉妬し、他人の放蕩についてはあっちこっちで言いふらす。

謎底…冗談に日を暮らして、古の道に思いを致さず、人の善行を聞いてはそねみ、過惡を聞いては宣伝する。

《註》謎底は『小学・嘉言第五』による。文意の連想で解く。

54

譏世情 三台

撫掌堂中嬉笑語 休想昔日聖人言

自述 三台

鄰舍養兒我也養 聰明魯銳一般身
或作朝廷金紫客 或作先驅後擁人

古文四句

兩家同（各）生子 賢愚同一初
一為公与相 一為馬前卒

《詠》隣の家も我が家も息子ができたが、両方とも聡明でもなく愚かでもなく普通の子である。しかし、一人は朝廷に入って出世し、もう一人はただの付き人となった。

謎底…両家それぞれ子が生まれたが、頭の良し悪しは、最初はみな同一である。一人は諸侯や宰相になって出世し、一人は馬の前を進行する兵卒となった。

《註》謎底は韓愈「符読書城南」によるが、連続の四句ではない。文意の連想で解く。

咏孔明 三台

將終尚自禳天星 曾何長沙識「関」津
八陣堂々能制敵 屢出屢捷奏佳音

孫武兵書二句

知己知彼 百戰百勝

《詠》良將は結局自ずと強運を持ち、長く戦場に立ち関門や渡し場を記憶することはないだろう。八陣を駆使し堂々と敵を制し、出兵する度に勝利をし、吉報をもたらすのだ。

謎底…自分を知り相手を知れば、百戦百勝できる。《註》謎底は『孫子兵法・謀攻第三』によるが、連続の二句ではない。文意の連想で解く。

咏張良・進履 三台

圯橋春水漲長川 進履逡巡聽所言
五日平明須早会 兵書一本贈英賢

千字文一句

何遵約法

《詠》圯橋の下、長い川に春水が満ちあふれていた。
 「張良が老人の」落ちた履を何度も取ってきて捧
 げると、「老人に」こう告げられた。「五日後の早
 朝、必ずここで会おう」と。「約束の日に行くと、」
 英賢は一冊の兵書を贈られた。
 謎底…蕭何は「高祖の」約法の精神を遵守する。
 《註》文意の連想で解く。

58

西江月

三台

堂上八音之樂^① 聴来難得相同
 連城趙壁価無窮 不值一文何用^②

千字文一句

樂殊貴賤

59

対聯

三台

鼓瑟吹笙^① 天子与庶民有異
 立綱陳紀 小人於君子不^② 同

千字文二句

樂殊貴賤 礼別尊卑

【燕台】【妙錦】【竜頭】〈同〉

① 【万用】【万書】【探精】六律、【新裁】喧嘩

② 【万用】【万書】【探精】須何用

《詠》堂上で奏でられる音楽は「樂」、どれも異な
 るように聞こえる「殊」。連城の壁は値のつけよ
 うはないが「貴」、一文の値打ちもなければ無用
 である「賤」。

謎底…音楽は貴賤に従って形式が異なる。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせ
 て四文字の謎底にたどりつく。

①【探精】歛声樂地

②【万用】【万書】【探精】難

《訳》瑟を弾き、笙を吹くこと、天子と庶民は異なる。綱紀を正すこと、小人と君子は同じならず。謎底…音楽は貴賤に従って形式が異なり、礼は尊卑によって区別がある。

《註》文意の連想で解く。

対聯 三台

商山老叟挽正劉朝儲位

傅岩賢士夢叶殷室高宗

千文二句

綺廻漢惠 説感武丁

《訳》商山老叟〔東園公・綺里季・夏黄公・甬里先生〕は劉漢の恵帝を復位させた。殷の高宗〔武丁〕は傅岩賢士〔傳説〕に補佐される夢を見た。

燕台

謎底…綺里季〔などの四賢人〕は、漢の恵帝を太子の位にもどし、傳説は武丁〔殷の高宗〕に感応した。

《註》文意の連想で解く。

燈毬玩処響琵琶 雅唱謡詞遍里家

楼上伝杯人已醉 席中猶自唱梅花

千字文一句

弦歌酒宴

【妙錦】【竜頭】【新裁】〈同〉

《訳》丸燈籠が掲げられているところから琵琶の音が聞こえてくる〔弦〕。優雅な謡曲は近隣の家々に充滿した〔歌〕。上の階で杯を交わす人はすでに酔っているが〔酒〕、席の中ではあいかわらず〔梅花落〕をうたっている〔宴〕。

62

【燕台】

農具犁鋤不離身 心々稼穡要耕耘
三餐莫道來容易 還願辛勤積穀因

千字文一句

器欲難量

【妙錦】【竜頭】【新裁】〈同〉

《訳》農具・犁・鋤をつねに持ち歩き〔器〕、心を農作業に注ぎ耕作しようとする〔欲〕。一日三食を得るのが容易いと言わないで〔難〕、願わくはよく働いて穀物を積むことである〔量（糧）〕。

謎底…自分の器量は他人には測り難いように心が

謎底…琴を弾き、歌をうたって、酒盛りし宴会を開く。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせで四文字の謎底にたどりつく。

63

【燕台】

長天雁独飛 屋破雨澆澆
節婦孀居苦 伝名天下知

千字文一句

孤陋寡聞

【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】揚

《訳》雁が一羽、広い空を飛んでいる〔孤〕。屋根が破れて雨水が落ちてきた〔漏（陋）〕。操をかたく守る寡婦の生活は苦しいが〔寡〕、その名声は天下に伝わった〔聞〕。

謎底…孤独で頑なな人、見聞の狭い人

ける。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせで四文字の謎底にたどりつく。第四句は「糧」を同音字の「量」に置き換える。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字の謎底にたどりつく。第二句は「漏」を同音字の「陋」に置き換える。

64

【万用】

朝廷列着武和文

千字文一句

府羅将相

【万書】【探精】〈同〉

《訳》朝廷には武官と文官が並んでいる。

謎底…役所には将軍や宰相が並ぶ。

《註》文意の連想で解く。

65

【万用】

乱臣十個致清平

千字文一句

多士是寧

【万書】〈同〉

【探精】不

《訳》国をよく治める賢臣が十人もいれば太平の世が築かれる。

謎底…多くの人材がいて、天下はほんとうに安寧となる。

《註》文意の連想で解く。「乱臣」には「政治に長ずる賢臣」「臣道を乱す逆臣」の二つの語釈がある。

謎底の文意から、ここは「賢臣」を指すことがわかる。「致」を「不」に作る【探精】の異文は、明らかに「逆臣」の語釈を取っていて、文意は通っているが、謎底と合わなくなる。

66

【万用】

端居九五談天德 恭己无為四海寧

千字文二句

坐朝問道 垂拱平章

【万書】【探精】〈同〉

《訳》帝王の座にきちんと腰を据え、天徳を説く。身をつつしみ、無為にして治まる天下は安寧である。

謎底…朝廷にいて、道を求める。何もしないで、国を公明に治める。

《註》文意の連想で解く。

万用

錢玉蓮抱石投江 王十朋独守空房
錢安撫為官清正 鄧尚書告老還鄉

千字文一句

節義廉退

【万書】【探精】〈同〉

《訳》錢玉蓮は石を抱えて入水したが〔節〕、王十朋は再婚しなかった〔義〕。錢安撫は官吏として清廉であり〔廉〕、鄧尚書は年老いて退職し郷里に帰った〔退〕。

謎底…節操、道義、清廉さ、謙虚さ

《註》各句の文意（すべて『荊釵記』という元末明初の戯曲による）から一文字ずつ連想し、あわせて四文字の謎底にたどりつく。

【書名類】

68

燕台

騷人情性載其書

書名一

詩經

70

燕台

道合乾坤藏尺牘

書名一

易經

69

燕台

五帝三王出治図

書名一

書經

71

燕台

青黄白帝久同居

書名一

春秋

《詠》三皇五帝の治国の書物。

《註》「図」で「書」を連想する。

《詠》詩文作者の気質はその書物に載っている。
《註》「騷」で「詩」、「書」で「経」を連想する。

《詠》天地の道と理は尺牘〔書簡〕の中に隠されている。

《註》文意の連想で解く。

《詠》青黄白帝〔道教における三官大帝〕が久しく同居する。

《註》五行説において、「青」は春（木）の色、「黄」

「白」は秋（金）も色であるため。

72

燕台

家門彬々載聖賢

書名一

礼記

《訳》文人輩出の一族に聖賢の名が記されている。
《註》この「彬々」は「文化的に発達する」と解釈したが、「彬々有礼」という熟語があるように、「彬々」は「礼」を連想させる語である。「載」から「記」を連想するので、あわせて「礼記」となる。

73

燕台

三十年来^①始読書

不前不後一人愚^②

師生終日商量事

好弁区々一丈夫

74

燕台

配物求吾（伍）成美句

書名一

対類

書名四

大学 中庸 論語 孟子

①【万用】【万書】【探精】歳後

②【万用】【万書】年将半百返痴愚、【探精】生来半百方始□

《訳》三十歳にして勉強をはじめ「大」人になってから「学」「習」、前後ともなく「中」ただの愚か者「平凡」庸である。先生と学生は一日中話し合うが「論語」、取るに足らない論弁好き「とりとめがない」孟の男「子」である。
《註》文意の連想で解く。

千家詩

《訳》並べる物を求め、組み合わせて美しい句を作り上げる。

《註》文意の連想で解く。

75

燕台

小書生把我來尋

書名一

蒙求

77

燕台

照見胸中鏡一輪

書名一

明心宝鑑

《訳》幼い学生が私を探しにきた。

《註》「幼い学生」で「蒙」、「探す」で「求」を連想する。

【万用】月一輪、【万書】一輪月

《訳》胸の中〔心〕を照らし現す〔明〕一枚の鏡〔宝鑑〕。

《註》文意の連想で解く。

76

燕台

群賢吟咏成篇帙

書名一

78

燕台

大兵端楷五音清

書名一

洪武正韻

《訳》多くの兵〔盛大な軍勢〕洪武〕が端正な楷書〔正〕を書き、きれいに発音する〔五音清〕。

《註》文意の連想で解く。

79

燕台

七三四五将身喪

書名一

十九史

【万用】【万書】〈同〉

《訳》七三四五、身を亡ぼした。

《註》「七三四五」は合計すると「十九」、「身を亡ぼす」とは「死」であり、「史」の字音に近い。

80

燕台

室中無我事難成

書名一

居家必用

《訳》私が家にいないと何事もなしえない。

《註》文意の連想で解く。

81

燕台

夜来如見家中信

書名一

夢書

《訳》夜中に家からの手紙を見たようだ。

《註》「夜中」で「夢」、「手紙」で「書」を連想する。

82

燕台

兩個囲棋各不贏

書名一

通書

84

燕台

《註》文意の連想で解く。

兵家勝敗逞威争

書名一

棋勢

83

燕台

《訳》二人は各々囲碁に勝利できなかった。
《註》「両方負ける」という意味の「同輸」を同音漢字に置き換えて「通書」と解く。

□□□□無楷字

書名一

本草

85

万用

睡中得信総成虚

書名一

夢書

【万用】刑部法帖、【万書】一部法帖
《訳》習字の手本が一冊あって「手」「本」、中には楷書の字が一つもない「草」書。

【万書】【探精】〈同〉

《訳》眠りの中〔夢〕で得た手紙〔信〕「書」はい
つも虚しく消える。

《註》82と同じ着想である。

【大明律類】

86

憶別 三台

墮水失爹^①音信無 自作紅粧篆字符

潜過^②重門江口去^③ 驀地乘舟泛五湖^④

律語四條

沉溺公文 私造印信

越渡関津 私船下海

①【万用】【万書】児夫、【探精】鬼天

②【燕台】【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】

【五車】【探精】出

③【燕台】【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】

【五車】【探精】並江海

④【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】過五湖、

【万用】【万書】偷過湖、【探精】偷過海

《訳》水に落ち、父を見失い、消息は絶った。赤い篆書の符を自ら作った。要塞を潜って大川の河口へ行き、まっしぐらに舟に乗って各地を巡った。

87

対聯 三台

信陵君窃符救趙 馬幼常失陷街亭

律語二条

擅起官軍 主将不固守

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

《訳》信陵君は割符を盗んで趙国を救った。馬謖は街亭の戦いで惨敗した。

謎底…命令なしに官軍を起こすこと、主将が固守しないこと

《註》文意の連想で解く。

燕台

纔換弓鞋解帶羅 孤眠偏厭雨声多
 閨門無伴重々閉 頻啓朱唇為甚么

律語一条

脱漏戸口

【竜頭】 【五車】 〈同〉

【妙錦】 【新裁】 懶

《訳》 やつと弓鞋〔纏足婦人が履く靴〕を脱ぎ、
 帯を解いた〔脱〕。一人で寝る夜はうるさい雨音
 がいやになる〔漏〕。寝室の中に伴侶がなく、す
 べての扉を閉じている〔戸〕。それでも頻りに赤
 い唇を開くのはなぜだろう〔口〕。

謎底…戸籍に登録しないこと

《註》 各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせ
 て四文字の謎底にたどりつく。

燕台

大小老婆班次乱 不分長幼做夫妻
 問^①得清白無仇^②屈 自家夫配自家妻

律語四条

妻妾失序 尊卑為婚

弁問（明） 冤枉 同姓為婚

【妙錦】 【竜頭】 〈同〉

① 【新裁】 【五車】 考

② 【万用】 【万書】 【探精】 私

《訳》 大小女房の順序が乱れ、年齢や地位の分別
 なく夫婦になった。清廉潔白で私怨はないと判明
 した。同じ家の夫と妻を配偶者とする。

謎底…正妻と妾の順序の乱れ、尊卑の別なく結婚
 すること、冤罪の弁明、同姓者の結婚

《註》 文意の連想で解く。

90

燕台

撇了爹娘去做官

律語一条

棄親之任

【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【探精】〈同〉

《訳》両親を捨てて官職につく。

謎底…老親を扶養しないこと

《註》「之」には「おもむく」「の」と両方の意味を持つ。謎面の文意からは「おもむく」と連想するが、謎底の「之」は接続語である。

92

万用

狗腸狗血祭世尊

律語一条

上(褻)流神明

【万書】〈同〉

《訳》犬の腸と血で世尊を祭る。

謎底…神を冒瀆する行為

《註》文意の連想で解く。

91

燕台

雁度過関通戦書

律語一条

飛報軍情

【官名類】

93

【万書】

諸葛深謀迎魏師

官名一

兵備

【探精】施

《詠》諸葛亮は謀略を深く考え、魏の軍隊を迎撃した。

《註》文意の連想で解く。「兵備」は「兵備道」または「兵備官」の略。主に軍事・監察・裁判を司る。

95

【探精】舞

《詠》孔子は瑟を弾いて顔回を憶った。

《註》謎を解くには「おもう」の「思」を同音字の「司」に置き換える。「司徒」は教育を司る官職。

【万書】

東風解凍百花開

官名一

春坊

【探精】〈同〉

《詠》東風が吹き、大地は解凍され、いろいろな花が開いた。

《註》文意の連想で解く。「春坊」は皇太子の東宮（春宮）所属の官署。

94

【万書】

仲尼鼓瑟憶顔回

官名一

司徒

【万書】

相引王孫摘錦回

官名一

招討

【探精】〈同〉

《訳》貴族子弟が連れ合って優勝を取って帰った。

《註》文意の連想で解く。「引」から「招」を、「摘

錦」から「奪標」へ、そして「討」へと連想する。「招

討」は盗賊・匪賊など武装反乱者を討伐または帰順させる武官。

【万書】

伸手高扳紅与紫

官名一

探花

【探精】攀

《訳》手を伸ばして色とりどりの花を摘んだ。

《註》文意の連想で解く。「探花」は科挙試験に三

番で合格した人。

【万書】

幾多枝葉出牆来

官名一

員外

【探精】〈同〉

《訳》たくさんの枝葉が壁の外まで伸ばしてきた。

《註》文意から「園外」と読み取り、「園」を同音字の「員」に置き換える。「員外」は「員外郎」

の略。定員のほかに設けた官である。

99

〔万書〕

雷声霹靂天下聞

官名一

同知

《訳》はげしい雷鳴が天下に轟く。

《註》文意の連想で解く。「同知」は各官職の副職。

100

〔万書〕

昼夜行走不留停

官名一

給事

《訳》昼夜歩いて留まらない。

《註》文意から「急事」と読み取り、「急」を同音

字の「給」に置き換える。「給事」は「給事中」

の略。天子のそばで雑事をする役である。

101

〔万書〕

服色翩々色様鮮

官名一

繡衣

《訳》服の様式が風流で色が鮮やかである。

《註》文意の連想で解く。「繡衣」は前漢の監察官

である。「繡衣使者」「繡衣御史」「繡衣直指」な

どともいう。

102

〔妙錦〕

安排香燭候君音 拜見官員論事情

幫貼先生時訓導 還將經史詰文人

官名四

待詔 参議 助教 博事（士）

《訳》香燭を手配し君主の命を待ち、官員に謁見

し事情を論じる。教師に補助し時々訓導する。さらに経史をもつて文人に詰問する。

《註》文意の連想で解く。「待詔」は朝廷の顧問として待機する技術官。「参議」は参謀官。「助教」は教授官に次ぐ官。「博士」は教授官。

「同知」は各官職の副職。「経歴」は公文書の受領・発送を司る官職。

妙錦

頓守詩書不異途 訓諸小子聽言辞

聖経伝講相通習 郷学先由進国都

官名四

学正 教諭 同知 経歴

【竜頭】〈同〉

《訳》一途に詩書を研鑽し、子どもを教え導く。

聖人の経伝を遍く習い、郷学を経て国都に入る。

《註》文意の連想で解く。「学正」は国子監所属の

学官または地方学校の学官。「教諭」は各県の教官。

地名類

104

述懷
〔三台〕靈禽蟠遶^① 半天飛 合家天佑得康寧^②祖父在堂添福壽^③ 舖(舖)兵路上拆公文^④

府名四

鳳翔府 吉安府 重慶府 開封府

【万書】【探精】第一・四句のみ

①④ 【万書】【探精】 靈鳥盤遶、私拆公文

② 【竜頭】 康佑得安寧 ③ 【燕台】【妙錦】 禄

《詠》 靈禽は中天を回旋し「鳳翔」、一家は天の加護により健康と安寧を得「吉安」、祖父は健在し

福寿が増した「重慶」。鋪兵は途中で公文書を開封した「開封」。

《註》 句ごとに、「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

105

嘆咏
〔三台〕

霹靂船頭響一声 征倭巨艦用梯登

買紙做漿船上用 乾河水漲楫堪行

州名四

雷州 高州 湖州 通州

《詠》雷が船の先頭に落ち、大きな音を立てた「雷」。

倭寇を征伐するための巨艦は梯子で登る「高」。

紙を買って糊を作って船上で使う「糊(湖)」。渴

水だった川に水が漲って船が通行できるようになった「通」。

《註》 句ごとに、「州」の字を除いた地名の一文字を連想する。第三句は「糊」を同音字の「湖」に

置き換える。

106

思古
〔三台〕

洞中仙女遇劉晨 閔子辞官避水浜

栽柳門前思靖節 種桃城上説安仁

県名四

天台県 汶上県 彭沢県 河陽県

《訳》洞窟の中の仙女は劉晨に逢い「天台山」、関子騫は官を辞め、汶のほとりに隠棲した「汶上」。門前に柳の木を植え、靖節先生「陶淵明」をおもう「彭沢県」。城の上に桃の木を上、安仁「潘岳」の話をする「河陽県」。

《註》句ごとに、これらの故事や人物に係する地名を連想する。劉晨の故事は『太平広記』、関子の故事は『史記』に見る。陶淵明は「五柳先生」「靖節先生」とも呼ばれ、彭沢県令を務めていた。潘岳は西晉時代の文人で、字は「安仁」。『世説新語』には、潘岳の容姿が美しいため、彼が車で出かけると、女性たちに投げ入れられた果物で車がいっぱいになったという逸話が載っている。また、

107

『海録碎事』によると、彼が河陽県で県令を務めていた頃、県内に桃李を遍く植えさせたという。

咏古 三台

東蕩西除覇業成 全憑將士致昇平
忽然起造承天府 挙用賢才属大明

州名二県名二

興国州 武寧州 新建県 進賢県

【燕台】【妙錦】〈同〉、【竜頭】第二句なし

《訳》東西を征伐し覇業をなした「興国」。將士たちの力があつたからこそ世の中がよく治まっている「武寧」。忽然、承天府を造りはじめた「新建」。賢才を挙用し大明に隸属させる「進賢」。

《註》句ごとに、「州」「県」の字を除いた地名の二文字を連想する。

108

〔万書〕

父母安康身又貴

府名一

重慶府

【探精】〈同〉

《訳》父母が安寧であり高貴な身分を有する。

《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

109

〔万書〕

天賜禎祥没是非

府名一

吉安府

《訳》天から吉兆を賜り、いざこざがない。

《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

110

〔万書〕

作福祝保祈求泰

府名一

保寧府

《訳》幸福・加護・平安を祈る。

《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

111

〔万書〕

象牙板児造成船 造得船児不用錢

三日三夜撐不到 相公還在船上眠

州名四

貴州 饒州 池州 瑞州

【探精】 解板

《訳》象牙の板で船を造った〔貴〕。その船を造るのに金がかからなかった〔饒〕。三日三晩漕いで

もたどりつけない「遲（池）」。
彼はまだ船の中で眠っている「睡（瑞）」。

《註》句ごとに、「州」の字を除いた地名の一字字を連想する。第三句は「遲」を同音字の「池」に置き換え、第四句は「睡」を類音字の「瑞」に置き換える。

万書

東方漸々日東昇 長亭人馬接公卿

三百文錢過一渡 聖旨招来百姓寧

県名四

建陽県 候官県 貴溪県 紹安県

【探精】百万

《訳》東の空に日が徐々に昇り「漸（建）陽」、人と馬で宿駅から公卿を迎える「候官」。一回の川渡りに錢三百文も払う「貴溪」。聖旨が民の安寧

をもたらした「詔（紹）安」。

《註》句ごとに、「県」の字を除いた地名の二文字を連想する。第四句は「詔」を類音字の「紹」に置き換える。

人名類

113

燕台

吾兒之子有施為 鑿壁偷光夜讀書
縫線路中常憶母 教人終日倚門閭

人名四

孫權 孔明 子思 呂望

【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【探精】〈同〉
《訳》我が息子の子〔孫〕は出世した〔權〕。壁に
穴を開けて〔孔〕隣家から漏れた光〔明〕で勉強
を励んだ。縫い目を見るところねに母を思い出し〔子
思〕、一日じゅう〔屢（呂）〕門に寄りかかって眺
めている〔望〕。

《註》文意で漢字を連想し、連想した漢字を組み
合わせて人名にたどりつく。第四句は「屢」を同
音字の「呂」に置き換える。

114

燕台

傍流築室倚江湖 門遶青峦浪怕（拍）廬
走避是非甘隱遁 蒼天感戴幸無虞

人名四

伊川 山涛 陶潜 謝安

【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉
《訳》流れの近くに家を建て、江湖に寄りかかる〔依
（伊）川〕。家門は青い山に囲まれ〔山〕、廬は浪
にぶつけられる〔濤〕。いざこざを避け〔逃（陶）〕、
隱遁生活に甘んじる〔潜〕。蒼天に感激し〔謝〕、
憂いのない人生に幸運を感じる〔安〕。

《註》句ごとに文意から二文字ずつを連想し、一
部同音字に置き換え、人名にたどりつく。

115

万用

鎖住皇帝門不開

人名一

関羽

【万書】【探精】〈同〉

《訳》皇帝〔御（羽）〕を閉じ込め、門は開かない

〔関〕。

《註》文意から二文字を連想し、「御」を類音字の

「羽」に置き換える。

【万用】

蜘蛛結網等虫来

人名一

張飛

【万書】【探精】〈同〉

《訳》クモは網を張って虫が飛んでくるのを待つ。

《註》文意から「張」と「飛」の二文字を読み取る。

【万用】

雪夜修書去取被

人名一

韓信

《訳》雪が降る夜に「布団を取りにくい」という

旨の手紙を書いた。

《註》「雪が降る」から「寒」を読み取って同音字

の「韓」に、「手紙」を「信」に置き換える。

【万用】

停噴作喜春風面

人名一

顔回

【万書】【探精】〈同〉

《訳》怒りを喜びに変え、春風のような表情になる。

《註》文意の連想で解く。

119

【万用】

痛惜孩兒受苦辛

人名一

閔子

【万書】【探精】〈同〉

《訳》子が受けた辛さと苦しさで心を痛める。

《註》「痛惜」から「憫（閔）」を連想し、「孩兒」を「子」に置き換える。

120

【万書】

一帆風送到蓬萊

人名一

樊噲

【探精】〈同〉

《訳》満帆の風で蓬萊まで送る。

《註》「帆」を類音字の「樊」に置き換え、文意から「快（はい）」を読み取り、同音字の「噲」に置き換える。

121

【万書】

終日哀々慕双親

人名一

子思

【探精】〈同〉

《訳》一日じゅう悲しそうに両親を恋しく思う。

《註》文意の連想で解く。

122

【万書】

睡熟逢兒醒又驚

人名一

孟子

【探精】〈同〉

《訳》眠りに落ちたら、子どもが起きたので、自分もびっくりして目が覚めた。

《註》「眠り」から「夢」を連想して同音字の「孟」に、「児」を「子」に置き換える。

【万書】

懷孕婦人肚裏疼 孩児今夜必然生
三朝放在筐籃裏 四朝落地就能行

人名四

子貢 子夏 子張 子游

【探精】〈同〉

《訳》妊婦がお腹の痛みを感じたので「子拱（貢）」、

赤子は今晚中にきつと生まれるだろう（「子下（夏）」）。生まれたら三日間は揺籃の中に寝かせ（「子張」、四日目には地に足がついて歩ける「子游」）。

《註》全体的に赤子のことについて書いているので、「子」を読み取る。それから、句ごとに赤子の状態を表す動詞を連想する。第一句は「拱（押し上げる）」を連想し、類音字の「貢」に置き換え、第二句は「下（降りてくる）」を連想し、同音字の「夏」に置き換える。第三句は「置く」という意味の「張」を、第四句は「歩き回る」という意味の「游」を連想する。それぞれ「子」の字と合わせると、孔子の弟子の名前にたどりつく。

【万書】

世間田地都占了

呼称一

霸王

【探精】〈同〉

《訳》世間の土地をすべて奪った。

《註》「奪う」という意味の「占」から「覇」を連想し、「世間すべての土地を有する」ことから「王」を連想する。

【詩・詞・曲類】

125

送行 三台

登途携手且停驂 謾把花言蜜語談
準「擬」回程黃菊綻 前三三与後三三

西廂記二句

臨行時掇賺人的巧舌頭

指歸期約定在九月九

《訳》旅に出るときに手を取り合つて暫し馬を止め、いたずらに甘い言葉を交わした。菊の花が咲く頃に帰ると予想し、前三三と後三三。
謎底・別れ際に言葉巧みにまくしたて、九月九日に帰つてくると約束した。

《註》謎底は元・王実甫『西廂記』第五本第一折による。文意の連想で解く。第四句の「前三三後三三」は『碧巖録』第三十五「無著見文殊」による。ここでは三×三で「九」という数字を得る。

126

憶別 三台

一別夫君已九秋 雲山遙遠見無由
魚沉雁杳空懸望 何事忘家滯外州

香囊記一句

人迢々書未歸

《訳》夫君と別れてすでに九年経った。遥かなる雲山を隔てて会うすべがない。ようとして音信がなく、ただ空しく待ちわびている。なにゆえに家を忘れて他郷に滞留しているのか。

謎底・人ははるか遠く、手紙はまだ来ていない。
《註》謎底は明・邵璨『香囊記』第十九齣による。文意の連想で解く。

127

閨怨 三台

海棠不比旧容光 蟬鬢無心对鏡粧

只因張敞（敞）留京兆 致使何君往建康

琵琶記四句

朱顏非故 綠雲懶去梳

奈画眉人遠 傳粉郎去

《訳》紅顔は昔のような風采がない。鏡の前で黒い髪髪を整理し化粧する気になれない。張敞が京兆に留まったがために、何君〔何晏〕は建康に行ってしまった。

謎底…容顔は昔のように若いままではなくなつた。黒髪に櫛を通すのも気が進まない。いかなせん眉を描いてくれたあの人は遠くへ行ってしまった。

《註》謎底は元・高明『琵琶記』第九齣による。文意の連想で解く。第三句の張敞は、京兆尹の官職に至った前漢の人物で、「張敞画眉」という四字熟語でよく知られている。彼が妻の眉を描くと

128

いう逸話は『漢書・張敞伝』にみる。第四句の「何君」は「傳粉何郎」こと何晏という人物で、『世説新語・容止』によると、彼は粉でも塗ったような色白肌の持ち主だった。建康は現在の南京、三国時代に「建業」と呼ばれ、呉的都だった。何晏は曹操の養子で、魏の人なので、建業は彼にとつて遠い異郷だったわけである。

旅懷 三台

高堂雪 ① 髮步難行 ② 荆室青春総妙年

十千嶺隘程途遠 鱗鴻絶跡没人伝

琵琶記三句

親衰老 妻女嬌

万里関山音信杳

【妙錦】へ同

①【燕台】白 ②【燕台】【五車】難行歩

129

《訳》親は白髪の高齢で歩くのもままならない。

妻はまだ青春で妙年と言われる年頃。万里の山道は険しく遠く、手紙は跡を絶ち、届く人もいない。謎底…親は老いて妻はまだ幼く、万里の関山で隔たって音信が少ない。

《註》謎底は元・高明『琵琶記』第十六齣による。文意の連想で解く。

遊賞 三台

騷人擱筆慢尋芳 明媚韶光賽洛陽

佳致已收胞次裏 忽聞梅蕊暗舒香

千家詩一句

詩家清景在新春

《訳》詩人は筆を擱いていたずらに遊覧する。麗しい春景色は洛陽にも勝る。美景はことごとく目に収めたが、忽然と梅の蕾からの微かな香りが

130

漂ってきた。

謎底…詩家が愛する清新な景色は新春にあり。

《註》謎底は唐・楊巨源『城東早春』による。文意の連想で解く。第三句の「胞次」は文意が取れないため、試しに「眼波」とみて訳した。

月英赴約 三台

出門又怕惹閑情 去到梵宮月已沉^②

赴約海棠頻立久 醉魂不醒夢中人

千家詩一句

只恐夜深花睡去

【妙錦】【竜頭】〈同〉

①【新裁】【五車】非 ②【燕台】深

《訳》外に出るとまた人を惹きつけてしまう恐れがある。寺に着いた時にはすでに月が沈んだ。約束に赴き、海棠の近くに長く佇んだ。酔って夢の

中にいる人は目が覚めなかった。

謎底…ただ恐れるのは、夜が深くなって花が眠り込んだことだ。

《註》謎底は宋・蘇軾『海棠』による。文意の連想で解く。

閨情 三台

紅紫芬芳映画樓 幾欲登臨又帶愁

夢魂却到陽台下 驚醒相思在兩頭

千家詩一句

春色惱人眠不得

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

《訳》色とりどりの花が華やかな楼に映えている。登臨することを切に願うが愁色を帯びる。夢の中では何度もその楼台の下に行ったが、いつも急に眠りから目が覚めてしまうので、離れ離れになっ

た恋人のように想い合うしかない。

謎底…春の景色は人が眠れなくなるほど悩ませる。

《註》謎底は宋・王安石『夜直』による。文意の連想で解く。

誤佳期 三台

会郎曾許赴花陰 誰想冤家別戀親

南樓雁唳声悲惨 無眠又是月三更

千家詩一句

有約不來過夜半

《訳》恋人と花の下で逢引することを約束したのに、まさかあの人が浮気するなんて思いもよらなかった。南楼の上を飛ぶ雁は悲しく鳴いている。今夜も眠れなくて夜半が過ぎた。

謎底…約束した人は夜半が過ぎてもまだ来ない。

133

《註》謎底は宋・趙師秀『約客』による。文意の連想で解く。

夜坐 三台

疎林黯淡值黄昏 剪燭吟哦写就^①文
頃刻睹觀^②雲漢外 復飄凍雨細^③紛々

千家詩一句

日暮詩成天又雪

- ①【燕台】【竜頭】成、【新裁】【五車】完
②【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】挙目遠
睹

③【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】落
《訳》疎らな木立の中は薄暗く、ちょうど黄昏の時である。蠟燭を切って詩を吟じ、文章をしたためた。しばし高い空を眺めると、ふたたび凍った雨粒がばらばらと落ちてきた。

134

謎底…日が暮れて詩ができて、天気はまた雪と
なった。

《註》謎底は宋・方岳『雪梅』による。文意の連想で解く。

客情 三台

燈残漏尽滴壺銅 膏沢霏々下九重
酩酊玉山渾自倒 東窓日覺太陽紅

千家詩一句

夜深微雨醉初醒

《訳》灯火は消えそうになり、漏刻は水が尽きて、水滴が銅製の壺を打っている。雨が霏々として高い空から降ってきた。美しい人は酩酊し、体が自ずと横になった。東の窓から赤い曙光が見えた。謎底…夜が更け、小雨が降り、酔いから目覚めたばかり。

《註》謎底は唐・竇叔向『夏夜宿表兄話旧』による。
文意の連想で解く。

愛月 三台

皎々^①明々月一輪 望中^②端正在天心
忽然曙色東方白 謾把菱花手内擎

千家詩一句

皓魄当空曉鏡昇

【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

①【燕台】皓々 ②【燕台】月

《訳》清らかに輝く月が一輪。眺めると、ちょうど中天にかかっている。忽然と、曙色で東の空がようようと白くなりはじめ、漫然と菱の花を手にした。

謎底…明月が中天にかかり、曉に鏡が空に浮かぶ。
《註》謎底は宋・李朴『中秋』による。文意の連

想で解く。

玩月 三台

天河如練界空間 黃鶴樓中鉄笛閑
天運循環常不息 一輪宝月正団円

千家詩一句

銀漢無声転玉盤

《訳》天の川が絹のように空をかかっている。黄鶴楼の中に鉄の笛の音はしない。天運は止まることなく循環し、宝月が一輪、円くなっている。

謎底…天の川が音もなく流れ、玉製の盤のような美しい月が傾いていった。

《註》謎底は宋・蘇軾『中秋月』による。文意の連想で解く。

137

寄友 三台

折梅寄友到^①江南 祝付殷勤切莫忘
別後纔經春未幾^② 不期復見蕊^③飄香

千家詩二句

一年好景君須記 今日花開又一年

①【万用】【万書】【探精】過

②【万用】【万書】【探精】不久

③【万用】【万書】【探精】此葉

《詠》梅の枝を折って江南の友に送り、切々と「私のことを忘れないで」とことづけする。別れてからの春がわずか過ぎて、花がもう一度咲く頃を待たずに再会したい。

謎底…一年のうちのいい景色をよく覚えてほしい。今日、花が咲いて、また一年経ったことを知る。

《註》謎底の二句はそれぞれ、宋・蘇軾『贈劉景文』

138

と唐・韋応物『寄李儋元錫』による。文意の連想で解く。

閨怨 三台

東京城裏暮春時 万紫千紅觀馬蹄
巧女将来機上弄 何時經緯作緇衣

千家詩二句

洛陽三月春如錦 多少功夫織得成

《詠》暮春の頃、東の都の中で、馬が色とりどりの花を踏んで走っている。器用な女性は花を取ってきて機で織って、いくら織れば出仕する時の服ができるのか。

謎底…三月の洛陽、春景色は錦のように絢爛である。その錦は、どれほどの手間暇をかけて織りあげたのか。

《註》謎底は宋・劉克莊『鶯梭』による。文意の

連想で解く。

傷春 三台

幽齋懶歩意沉吟 細把河図義理尋
徒爾未聞些個事 紅英飛尽又因循

千家詩二句

閑坐小窓読周易 不知春去幾多時

《詠》 静かな書齋の中をゆっくり歩き、沈吟すること、没頭する。河図に隠された義理を丹念に探す。いささかも外の事に耳を傾けていなかったため、またもや花が知らずのうちに散ってしまった。謎底…小さい窓辺に座って周易を読んでいたら、春がいつの間にか去ってしまった。《註》 謎底は宋・葉采『暮春即事』による。文意の連想で解く。

玩賞・西江月 三台

偶值好天良夜 休辜美景芳辰
許今夜会姻親 勸罷同郎再飲

千家詩一句

但逢佳節約重陪

《詠》 ちょうどめでたい日の良い夜だ。この美しい景色と時節を裏切るわけにはいかない。今夜は親戚に会いに行くのをお許しください。親戚に酒を勧めたらまたあなたと飲む。謎底…ただ良き時節になったらまた同伴すると約束しよう。《註》 謎底は宋・程顥『遊月陂』による。文意の連想で解く。

燕台

荒年無米可充腸 容貌憔悴苦沒糧

142

謾說歲豐終有旦 家私売尽只空房

琵琶記一句

忍餓担飢何日了

【妙錦】【竜頭】【五車】〈同〉

《詠》凶年であるため、腹を満たす米がなく、容貌は憔悴し、食糧難に苦しむ。いたずらにいつかは豊年が来ると言っているが、家財道具は売り尽くして空っぽな部屋しか残っていない。

謎底…飢餓を我慢する日々はいつ終わるのか。

《註》謎底は元・高明『琵琶記』第二十齣による。

文意の連想で解く。

燕台

養子当年教子時 单因名利赴京畿
近来已絶鱗鴻字 不見雲山望眼迷

琵琶記一句

143

孩兒一去無音耗

【妙錦】【竜頭】〈同〉

【五車】還思

《詠》子を養い、子を教育した。子はただ名利のために京畿に赴いた。近頃はすでに手紙も来なくなって、遥かなる地を見ることもできず、待ち望む目が朦朧としている。

謎底…子が出かけたまま音信がない。

《註》謎底は元・高明『琵琶記』第二十齣による。

文意の連想で解く。

燕台

屈数帰期歲月纏 廂中已剩寄来箋
粧台照睹全差別 憔悴衰顔弗及先

琵琶記一句

指下余音不似前

燕台

灯影沉沉漏轉深 遅々月色夜凄其

【妙錦】【竜頭】〈同〉

《訳》指を折りながらあの人の帰る期日を数えるようになって、多くの月日が経った。部屋の中には届いた手紙が残っている。鏡台で覗いたら自分の顔がまったく違って見えた。すっかり憔悴し衰え、昔の容貌には到底及ばなくなっている。

謎底…指の下から流れ出る音は以前のもものと比べ物にならない。

《註》謎底は元・高明『琵琶記』第二十二齣による。文意の連想で解く。「音」という字の多義性を利用した。謎面の第二句では「たより」という意味の「音」を連想させ、謎底では「音楽」の「音」に置き換えている。

万用

観中每逐蓬萊伴 賓館始留執正客

紅娘私地携衾至 已是萱堂睡熟時

西廂記？

更深背母

【妙錦】【竜頭】〈同〉

【五車】抱

《訳》灯影は重く、漏刻の水位は深い。緩々とした月の光が淋しい夜を照らしている。紅娘がこっそり衾を抱えてきたその時、母親はすでに熟睡に落ちていた。

謎底…夜更けに母の目を盗んで。

《註》文意および謎面に書かれている「紅娘」という人物名から『西廂記』と推測できるが、謎底四文字の出典は未詳。文意の連想で解く。

146

増広賢文二句

道院迎仙客 書堂隱相儒

【万書】【探精】〈同〉

《訳》道観でたびたび蓬萊からの友を迎え、賓館にはじめて正道を守る客が泊まった。

謎底…道院で仙人を迎え、書堂に宰相儒者を住まわせる。

《註》文意の連想で解く。『増広賢文』は明代に編纂された格言集である。

【万用】

門種新篁巢鸞鳥 沼中金鯉聽春雷

増広賢文二句

庭栽棲鳳竹 池養化竜魚

【万書】【探精】〈同〉

147

《訳》門前に植えた初生の竹に鸞鳥が棲みつぎ、

金色の鯉は沼の中で春雷を聞く。

謎底…庭に鳳凰が棲む竹を植え、池に竜に変化する魚を飼う。

《註》文意の連想で解く。

【万用】

当今上位敬賢才

神童詩一句

天子重英豪

【万書】【探精】〈同〉

《訳》当世の御上は賢才を敬重する。

謎底…天子が英豪を重んじる。

《註》文意の連想で解く。『神童詩』は五言絶句を集めた児童向けの漢詩教本である。

【万用】

寒門未教習儒業

増広賢文一句

家無讀書子

【万書】【探精】〈同〉

《訳》 貧しい家は子に儒学を勉強させたことがなかった。

謎底…家に勉学する子がいらない。

《註》 文意の連想で解く。

【万用】

一挙登科各処聞

増広賢文一句

成名天下知

【万書】【探精】〈同〉

【万用】

《訳》 一挙に科挙試験に合格しその名は広く聞かれた。

謎底…名声を得て天下に知られる。

《註》 文意の連想で解く。

読罷莊周臥小窓 故郷迢遞路茫茫

千家詩一句

蝴蝶夢中家万里

【万書】【探精】〈同〉

《訳》 莊子を読み終えて小さな窓辺に横になる。

故郷に遠く離れている。

謎底…胡蝶の夢の中、家は遠き万里の彼方。

《註》 文意の連想で解く。

151

【万用】

子規不解孤眠客 啼血梢頭半夜長

千家詩一句

杜鵑枝上月三更

【万書】 【探精】 〈同〉

《詠》 ホトトギスが独りで寝る人の心を解らず、
枝の先で血を吐くように鳴く長い夜の夜半。

謎底…ホトトギスが枝の先に立つ月夜の真夜中。

《註》 文意の連想で解く。「子規」と「杜鵑」はよく知られているホトトギスの別名である。

152

【万用】

紅零乱落舞又加 又報兒童捉柳花

千家詩一句

謝却海棠飛尽絮

153

【万書】 【探精】 〈同〉

《詠》 赤い花びらが乱れ落ちて宙を舞っていると
思えば、子どもたちが柳の綿を追っているようだ。

謎底…カイドウの花は散り、柳絮がことごとく飛んでいった。

《註》 文意の連想で解く。

【万書】

雲蔽蟾光勿上閣

増広賢文一句

無月不登樓

【探精】 〈同〉

《詠》 月の明かりが雲に覆われているときは楼閣を登らないで。

謎底…月の光がなければ登楼しない。

《註》 文意の連想で解く。

妙錦

江関連隔幾千程 峻嶺崎嶇又阻行
郡邑看来猶故里 風花雪月総傷情

千家詩一句

水遠山長処々同

《訳》河や関を次々と越え、何千里も隔たっている。
山道は険しく行く手を阻んでいる。道中の府県は
どれもふるさとに似ていて、四季の風景に心が
いつも痛む。

謎底…幾重の山と水を隔たっていても、景色は同
じ。

《註》文意の連想で解く。

【曲牌類】

155

閨怨 三台

寄語飛瓊窈窕娘 因何失約在西廂

鮫鮪孤枕難成夢 玉簫声断去忙(茫)々

曲牌名四

伝言玉女 誤佳期

羅帳裏坐 憶秦娥

《訳》ことばを美しい飛瓊に託し、なぜ西廂の約束を守らなかったのかと聞きたい。手巾を握って独りで寝ても眠れず、玉製の簫の音が途絶えて聞こえなくなった。

《註》謎底の曲牌名(調子の名称)を短文として捉え、文意の連想で解く。「飛瓊」は伝説の仙女の名前である。「鮫鮪」はすなわち「鮫綃」、伝説の鮫人が織る薄い絹の意味であるが、手巾を指す語としてよく使われる。「秦娥」は歌い女の代名詞であるが、ここでは恋人を指す。

156

昭君怨 三台

金蓮款步出宮難 可憐紅粉去和蕃

慕想芳容難再会 簇擁征馳出漠関

曲牌名四

歩々嬌 惜奴嬌 憶多嬌 上馬嬌

【燕台】款、【妙錦】移

《訳》纏足した足ではゆっくりとしか歩けず、宮殿から出るのも難しいのに、哀れる美人は和蕃のために送り出された。思い焦がれる芳容とはもう逢えないだろう。彼女は兵隊に簇擁され漠関を出た。

《註》文意の連想で解く。

157

春思 三台花落殘紅滿径^① 鮮 沉吟懊恨不成眠^②鏡鸞塵掩頻々倚^③ 盼看長安^④ 各一天

曲牌名四

鋪地錦 怨相思 傍粧台 望遠行

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

①【万用】【万書】野 ②【万用】【万書】抱恨未成眠

③【万用】【万書】匣掩空睜目 ④【万用】【万書】良人

《詠》花が散り、小道は落ちた花びらに飾られている。静かに口ずさみ悔恨で眠れない。鏡は塵に覆われ、鏡台に寄りかかって、今日もまた一日、長安の方向を眺めていた。

《註》文意の連想で解く。「盼」は字義未詳、試しに「待ち望む」という意味の「盼」とみて訳した。

宮情 三台

得待君王寵幸時 芙蓉如面柳如眉

君情淚怯姿容瘦 無復当年美貌持

曲牌名二

惜奴嬌 泣顏回

《詠》君主の寵愛を受けていた頃は、芙蓉の花のような顔に柳の葉のような眉だった。悲しくも君から得る情は薄くなり、かつてのような美貌にはもう戻れない。

《註》文意の連想で解く。

述古 三台

趙公園内遇鉏麇 唐主欣然接子儀

月下乘舟蘇子樂 呈祥胎鳥洞賓騎

曲牌名四

燒夜香 歸朝歡 夜行船 瑞鶴仙

【万用】第四句なし

【万用】【万書】唐王欣喜見子儀

《訳》趙盾は庭で鉏麁に遭った。唐の皇帝は喜んで郭子儀を迎えた。蘇軾は月下で小舟を浮かべて楽しんだ。呂洞賓は瑞祥の仙鳥に乗った。

《註》文意の連想で解く。趙盾は春秋時代晉の権臣。晉の靈公は彼と対立し、鉏麁という刺客を送って彼を殺そうとした。早朝に趙盾の屋敷に到着した鉏麁は、装束をきちんと身に着け、朝廷に出仕する準備を済んだ趙盾の姿を見て、刺殺を辞めて自ら頭を木に打ち付けて自殺してしまった。この故事は『春秋左氏伝』に記されている。謎底の「焼夜香」は「夜中にお香を点てて祈願する」と読み取れるため、転じて「夜中に起きている」という意味である。

郭子儀は安祿山を討伐し、都長安を奪回した唐の名将と知られている。蘇軾が小舟を浮かべて夜遊した話は彼の名文『赤壁賦』に見る。呂洞賓は中

160

国の代表的な仙人である。

趨朝 三台

翰林臣宰早朝回 竜顔咫尺拜金鑾

大会天下才能客 酩酊簇擁転家来

曲牌名四

三学士 朝天子 集賢賓 醉扶帰

【万用】【万書】前の二句のみ、「二二大臣朝内去、竜顔咫尺朝天子」に作る。

《訳》翰林、臣佐、宰相が早朝の政務から戻り、皇帝が乗る金鸞の車を咫尺から拝んだ。天下の有能な人材を集め、宴会で深酔いして、周りに取り囲まれながら家に帰った。

《註》文意の連想で解く。

自咏 三台

簪前喜鵲噪声喧 報道佳期在目前

〔喜〕見東籬黃菊綻 便邀佳客飲華筵

曲牌名四

生查子 好事近 金錢花 集賢賓

【万書】第二句のみ

《訳》簪の前でカササギが賑やかに鳴き、めでたい日が近いことを知らせる。東の籬に黄色い菊が咲いているのを見れば、嘉賓を招待し華やかな宴会を開こう。

《註》文意の連想で解く。第一句はカササギの鳴く声を表す字の「喳」を同音類形の「查」に置き換え、「生查子」をカササギの別称とする。

恩情 三台

金屋蟬娟影在東 情人有約總成空

記得少年騎竹馬 看々又是白頭翁

曲牌名四

錦堂月 誤佳期 耍孩兒 鮑老催

【燕台】【妙錦】【竜頭】【五車】〈同〉、【万書】第二句のみ

《訳》月が金屋を照らし、影を東に落とす。恋人たちの約束はいつも叶わない。記憶の中で竹馬に乗っていた少年は、とつくに白髪の翁となっている。

《註》文意の連想で解く。第四句からは「老」という文意が読み取れるため、曲牌の中では唯一「老」の字が入っている「鮑老催」にたどりつく。

対聯 三台

幼女緣分眉惟喜 麝蘭藏箆篋

佳人紅襯臉不勝 卮酒倚欄杆

164

曲牌名二

香柳娘 醉娘兒

《訳》縁の良い眉をしている幼女は、竹で編んだ小箱に収納される蘭麝〔香料〕を好む。顔を赤く染められた佳人は、酔いにまかせて欄干に寄りかかる。

《註》第一句は「幼女」から「娘」、「眉」から「柳」、「蘭麝」から「香」を連想する。第二句は文意から「酔」、「佳人」から「娘兒」を連想する。

燕台

別来懷恨積奴腸 納鳳挑鸞罷線筐
欲写衷情無剩紙 慵粧蛾黛少張郎

曲牌名四

繫人心 綉停針 意不尽 懶画眉

165

【妙錦】【竜頭】【五車】〈同〉

《訳》離れてから心の中に怨嗟が溜まってきた。刺繍していた鳳凰と鸞鳥を途中でやめた。心中を書こうとしたが紙が残っていない。化粧して眉を描く気になれないのは、あなたがそばにいないからだ。

《註》文意の連想で解く。

万用

五月牆頭何日開

曲牌名一

石榴花

【万書】〈同〉

《訳》五月の壁の上、花は何日に咲くのか。

《註》曲牌名に入っている花のうち、花期が五月となるのは石榴（ザクロ）のみである。

〔万用〕

不怕寒風瑞雪来

曲牌名一

臘月梅

【万書】〈同〉

《訳》寒風に恐れず、瑞雪が降る。

《註》文意の連想で解く。

【骨牌名類】

167

〔万用〕

季子求名身掛^① 竜泉遊未転^②

骨牌名一

蘇秦佩劍

①【万書】帯 ②【万書】【探精】魏国

《訳》季子は名を求め、竜泉剣を身に掛けて遊説し、
いまだ帰ってこない。

《註》文意の連想で解く。骨牌名とは骨牌の組み
合わせで作られた役の名称である。「季子」が謎
底の蘇秦のことを指すことばとして、『史記・蘇
秦列伝第九』の「見季子位高金多也」の一文でよ
く知られている。

168

〔万用〕

項劉立国交兵策馬戦無休

骨牌名一

楚漢争鋒

【探精】〈同〉

【万書】項羽劉邦

《訳》項羽と劉邦は国をたて、兵を交わり、馬を
駆けさせ、際限なく戦を繰り広げた。

《註》167番と合わせて対聯になる。

169

〔万用〕

孟冬和暖渾如青帝当權

骨牌名一

十月応小陽春

【万書】【探精】〈同〉

《訳》孟冬の時候、まるで青帝が権力を握ってい
るように暖かい。

《註》「孟冬」は冬の最初の月、旧暦の十月を指す

ことば。「青帝」は春を司る天帝である。

鐘旭抹額

170

【万用】

北斗光輝照耀上方斬馬

骨牌名一

七星劍

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》 北斗の光に照らされ、上方で馬を斬る。

《註》 「上方」は「上方劍」の略。または「尚方劍」ともいう皇帝専用の宝劍であり、尚方署により特製されたもの。

171

【妙錦】

隠々梵王宮裏催 推窓紅日尚徘徊

開奩鉛粉輕施設 頻把胭脂頰上堆

骨牌名一

【竜頭】 〈同〉

《訳》 寺の召集の音がかすかに聞こえる〔鐘〕。窓を推して外を見たら日がまだ赤い〔旭〕。奩〔化粧用具の入れ物〕を開いて軽く白粉をして〔抹〕、頻りに胭脂を頬の上に載せる〔額〕。

《註》 各句の文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字の謎底にたどりつく形式の謎である。

【字謎類】

172

拆字 三台

群羊失散竟何之 後学無文不見系
一個人兒頭頂板 二三四口自相親

四書一句

君子不器

【燕台】 【妙錦】 【竜頭】 【新裁】 【五車】 「群羊拆散
竟何之、孫学無文不見系。一個人兒頭頂板、一工
四口自相依。」

《詠》羊の群れを見失い「群―羊―君」、後学は一
文もなく繫束されず「孝（学）―文―子」。一人
は頭に板を載せ「个十一―不」、一工と四口がお
のずと寄り添う「4つの口十工―器（器）」。

謎底…君子は器ならず。

《註》謎底は『論語・為政第二』による。「離合（漢
字字形の分解・組み合わせ）」という字謎の典型
的な手法を使用しているため、四書類ではなく字

173

謎類に分類されている。

咏項羽 三台

項羽当年志気雄 誰知戦敗総無工
八千子弟今何在 自刎烏江始見空

項字拆一字

一

【妙錦】〈同〉

《詠》往年の項羽は雄大な心意気を持っていた。
しかし戦に敗れてすべてを失った。八千の兵士は
今どこにいるのか。烏江で自刎してはじめてその
虚しさが分かった。

《註》後ろの三句の「無」「何在（どこにいる）」「空」
はどれも「なくなる」という意味が読み取れるた
め、「取り除く」という解き方のヒントとなる。
つまり、第一句の「項」の字から、第二句から第

四句の「工」「八」「自」という三つのパーツを取り除くと、謎底の「一」の字にたどりつく。

烏江自刎 三台

項羽烏江失勝時 拔山力尽霸図虚
八千兵散無踪影 泣対虞姫月下離

勝字拆夫字

夫

《詠》項羽が烏江で勝利を失ったとき、山を抜くほどの力が尽きて、その覇図は虚となった。八千の兵士は跡形もなく散り、涙を流し月下で虞姫と決別するしかなかった。

《註》「尽」「散」「離」||取り除く。第一句の「勝」の字から「力」「八」「月」を取り除くと、謎底の「夫」の字にたどりつく。

垓下戦敗 三台

殺氣騰々戦不停 八千兵散楚歌声
渡頭抛却烏騅馬 明月當中不見形

騰字拆夫字

夫

【妙錦】〈同〉

《詠》殺氣がみなぎって戦いつづける。八千の兵士が散って楚歌が聞こえてくる。渡し口で烏騅馬を捨て、明月の夜に軍営から姿を消した。

《註》「散」「抛却」「不見形」||取り除く。第一句の「騰」の字から「八」「馬」「月」を取り除くと、謎底の「夫」の字にたどりつく。

憶古 三台

項羽当初苦戦時 休将二口把心疑
辺邦寧靖干戈息 十畝田児足食衣

戦字拆「田十」字

「田十」(卑)

《訳》項羽が烏江で勝利を失ったとき、山を抜くほどの力が尽きて、その覇図は虚となった。八千の兵士は跡形もなく散り、涙を流し月下で虞姫と決別するしかなかった。

《註》「散」「息」||取り除く。第一句の「戦」の字から二つの「口」と「戈」を取り除くと、謎底の「卑」の異体字にたどりつく。第四句の「足」を「たす」と理解し、「十」と「田」を足せば、「田十」となる。

177

偶遇「三台」

嵐鎖朱門撇未開 仙山々下遇多才
靈丹有志無心恋 買得長生術數回

朱字拆續字

續

《訳》朱門は山野の霧に閉ざされ、押しても開かない。仙人が住む山の麓で憧れの人と出会った。靈丹を得たいと思うが執着する気にはなれず、長生の術を買って帰った。

《註》第一句の「撇未開」はすなわち、「朱」の字から「撇(はらい)」を取り除くこと(「牛」の字が残る)。第二句はとくに仕掛けなし。第三句の「志無心」は、「志」から「心」を取り除くこと(「土」の字が残る)。最後に、第四句の「買」を「牛」「土」と合わせると、謎底の「續」となる。

178

偶題「三台」

準擬今春樂事濃 誰知此日竟成空
三分人事相羈絆 立国咸陽一木中

春字拆泰(秦)字

秦

《訳》この春に樂事が成せるだろうと思っていたが、この日においてすべてが水の泡となった。三割が人間関係のしがらみによるもので、一本の木で国を立て咸陽を都にするようなことである。

《註》第一句の「春」の字から第二句の「日」を取り除き、第三句の「三」と「人」を組み合わせると、それぞれ「秦」となる。第四句の「一」「木」を「秦」の下に立てると、「秦」にたどりつく。原本は「秦」に作るが、誤植であろう。第四句の「立国咸陽」からも謎底は「秦」と推測される。

179

思情

三台

正想鶯々又一空

偶然月下得重逢

共約他時来普「救」

竹林之下語從容

正字拆肯字

肯

《訳》鶯々に会おうと思って会えなかったが、偶然にも月夜に再会した。また別の日に普救寺で逢瀬し、竹林の下でゆっくり話すという約束を交わした。

《註》第一句の「正」の字から「一」を取り除き、「止」の字を得る。その下に第二句の「月」を足すと、謎底の「肯」となる。「肯」には「承諾」という意味があるため、第三句と第四句の文意とつながる。

180

花影

三台

時刻移陰一漏催 十分春色下瑤台

剛被太陽收拾去 却教明月送将来

時字拆肘字

肘

181

【妙錦】〈同〉

《訳》時が移り変わり、漏刻の水が減っていく。賑やかな春景色は神仙の住むところから降ろされた。太陽とともに拾い上げられたかと思ったら、今度は明月によって送られてきた。

《註》「漏」「下」「收拾」＝取り除く。すなわち、「時」の字から「一」「十」「日（太陽）」を取り除いて「寸」を得ること。「寸」の字を第四句の「月」と組み合わせると、謎底の「肘」となる。

待漏 三台

星斗疎明更漏残 露珠点々滴蘭杆
一退金門思故苑 人生忠孝兩全難

斗字拆个字

个

182

《訳》星がまばらな遅い夜中、結露がぼつぽつと欄干に落ちる。官を退けば故郷を思い、人生には忠と孝が両全しがたい。

《註》第一句の「斗」から第二句の「点々」と第三句の「一」を取り除き、「一」を得る。第四句の「人」と組み合わせると、謎底の「个」となる。

嘆儒 三台

才高道大一鴻儒 争奈無人肯薦嘘
忽然一朝雲霧起 管教士女下蓮除

儒字拆要字

要

《訳》才能が高く学問が博大な儒者だが、惜しいことになぜか彼を推挙する人がいない。いつか忽然とその障害がなくなれば、きつと彼に嫁ごうとする女性は見れるだろう。

《註》原本第四句の「蓮除」では文意が取れないため、ここでは類音字の「奩厨（嫁入り道具）」として訳してみた。まず、「儒」の字から第二句の「人（イ）」を取り除いて「需」を得る。そして、第三句の「雲霧」を意味する雨冠を取り除き、第四句の「女」を添えると、謎底の「要」にたどりつく。

新秋 三台

露竹残蟬昨夜秋 長空大火適西流
従今撇却炎蒸氣 漸覺西風又到頭

秋字拆栗字

栗

《訳》露が落ちている竹に秋の蟬が鳴いているのを見て、昨晩から秋になったことを知る。広い夜空を見れば、大火（心宿）がちょうど西へと移っ

た。今日から灼熱の猛暑が終わり、漸くまた西風が吹いてくるのを感じた。
《註》第一句の「秋」から第二句の「火」と第三句の「撇（はらい）」を取り除けば「木」が残る。「木」の頭に第四句の「西」を載せると、謎底の「栗」にたどりつく。

自述 三台

生来衣食不求人 素行檢点好持身
五湖四海皆兄弟 万事須教付度行

字四

勤謹和緩

《訳》生まれながらにして衣食を人に頼らず〔勤〕、素行に気をつけ慎み、よく自分を律している〔謹〕。どこの人とも兄弟のように接し〔和〕、何事も必ず十分考えてから行う〔緩〕。

185

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く謎である。「勤謹和緩」は官吏の四字の訓誡。「勤」は、職務に精励すること。「謹」は、身の持ち方を慎むこと。「和」は、同僚との間を調和し平和を保つこと。「緩」は、仕事を急がず、静かにやってゆくこと。『小学・外篇・善行』による。

君徳 三台

五穀豊登托上蒼 朝中文武列成行

領受明君恩寵愛 願教有徳效陶唐

字四

天官賜福

《訳》五穀豊穰は天からの恵み〔天〕。朝廷では文官武官が行列となす〔官〕。明君からの恩寵を受け〔賜〕、徳ある皇帝が陶唐氏〔理想的な天子像

186

である堯〕に倣うよう願う〔福〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。「天官賜福」は古代の民間信仰、福神とされる「天官」から福を賜ること。

閨情 三台

夜静無端繡戸開 起看嬌艷逞姿容

水肌王骨〔并カ〕寒素 疑是嫦娥宮裏来

字四

風花雪月

《訳》静かな夜に、寢室の門がわけもなく開いた〔風〕。起きて、美しさを競う艶やかな花々を見る〔花〕。水のような肌にあきん出る骨、冷たくて清楚で〔雪〕、まるで嫦娥の宮殿から来た者のようである〔月〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。

女徳・西江月 三台

説話務要誠実 為人作事仁慈

拈針挑繡用心機 対鏡梳粧華麗

字四

言行（徳） 工容

《訳》ことばは必ず誠実に「言」。行いと人柄は仁慈に「徳」。針仕事と刺繡には工夫を「工」。鏡を見て綺麗に身じまいをする「容」。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。「言（恭しいことば）」「徳（婦徳）」「工（裁縫）」「容（良い容貌）」は封建社会において婦人が修めなければならないとされた四行。『礼記・昏義』による。

懷古・西江月 三台

石崇珍宝敵国 王「公」帝戚權臣

范丹昔日「甌」生塵 晏□□□墜盛

字四

富貴貧賤

《訳》石崇の財産は国に匹敵する「富」。王公、王家の親族、権臣「貴」。范冉は昔、甌に塵を積もらせていた「貧」。

《註》石崇は西晋の富豪。范冉（范丹とも）は後漢の賢士、彼の清貧生活は「甌塵釜魚」の四字熟語でよく知られている。第四句は判読できない字が多いため、人物の特定が出来なかった。

述古 三台

圉城自尽齐王燭 不「帝」秦君魯仲連

琴鶴相随称趙忤 抱石投江錢玉「蓮」

字四

忠孝〔廉〕〔節〕

《訳》城が囲まれ、斉の王燭は自尽した〔忠〕。魯仲連は秦王に仕えなかった〔孝〕。趙忭はどこへ行っても琴と鶴を連れていた〔廉〕。錢玉蓮は石を抱えて河に身を投げた〔節〕。

《註》王燭・魯仲連の故事は『史記・田単伝』『史記・魯仲連鄒陽列伝』にみる。趙忭の故事は『宋史・趙忭伝』、錢玉蓮の話は戯曲『荊釵記』による。

懷古 〔三台〕

成湯解網施禽獸 雲長封庫却黃金
交接陳蕃魯下榻 七擒孟獲孔明心

字四

仁義礼智

191

合字 〔三台〕

不行不坐不成眠〔立〕 有夜相虧有夜円〔月〕
休使他人来問卦〔卜〕 非干己事莫相連〔呂〕

字一

龍

《訳》成湯は網を解いて禽獸に恩恵を施した〔仁〕。雲長〔関羽〕は庫を封じ黄金を拒絶した〔義〕。陳蕃は客をもてなすために腰掛けを差し出した〔礼〕。孔明〔諸葛亮〕は七度孟獲を捕獲し心を攻めた〔智〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。成湯が網を解く故事は『史記・殷本紀』、関羽が庫を封じる故事は『三国志・蜀書六・関張馬黄趙伝』、陳蕃下榻の故事は『後漢書・陳蕃伝』、孔明と孟獲の故事は『三国志演義』でよく知られている。

《訳》 歩かず座らず眠らず（立）、欠ける夜もあれば丸くなる夜もある（月）。人が占いを要求しても来させるな（卜）。自分と関係のないことには関わるな（忌）。

《註》 句ごとの文意から一文字を連想し、組み合わせさせて謎底の漢字と解く。第四句の「忌」は、正確には「自」の右側の縦画を無くす形。

閨情 三台

惜花間紅日西墜 閉朱戸不見多才
倚闌杆東君去也 悶無心懶傍粧台

字一 門

【燕台】 【妙錦】 【竜頭】 〈同〉

【万用】 「花間紅日已沉西、閉戸才郎没処尋、撲々

閃時人不見、懨々愁悶自無心。」

《訳》 紅日が花間に沈むのを惜しみ、朱門が閉ざされ、恋人と逢えない。欄干に寄りかかっているうちに日は沈み、気怠くて悶々と鏡台に寄りかかった。

《註》 句ごとに同じ漢字を解く謎である。「墜」「不見」「去」「無」 Ⅱ 取り除く。すなわち、「間」から「日」を、「閉」から「才」を、「闌」から「東」を、「悶」から「心」を取り除けば、それぞれ「門」の字となる。

燕台

不必憂愁淚 寬心自在嬉
明朝分別去 有日会佳期

字四

悲歡離合

194

【燕台】

九横并六直 諸人皆不識

去問朱文公 「也」猜了三日

字一

晶

【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【探精】「九横六直、

諸人不識。問朱文公、也猜三日。」

《詠》九本の横画と六本の縦画がある。これは何

195

【燕台】

木了又一口 非杏又非呆

若作杏呆猜 不是真秀才

字一

極

【万用】【万書】【妙錦】【探精】〈同〉

【竜頭】字

《詠》木がおわるとまた口が一つ。この字は杏でもなければ呆でもない。もし杏や呆と解いたら、まことの秀才ではない。

《註》第一句の五文字をすべて組み合わせれば謎

【妙錦】【新裁】【五車】〈同〉
【竜頭】日

《詠》憂愁な涙を流す必要はない「悲」。安心して自在に遊んで「歓」。明日には別れるが「離」、また良い日に会えるさ「合」。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。

の字なのか、誰もしらない。あの朱文公「朱熹」に聞いても、解くのに三日かかった。

《註》第一句・第四句で字形に関するヒントを出している。

底の「極」の字になる。

196

【燕台】

女子同眠 両又齊肩

人能扁担 月去耳辺

字四

好双大脚

【妙錦】 拖

【竜頭】 〈同〉

《訳》 女子がともに寝ていて「好」、兩人は又肩を並べている「双」。人は天秤棒を担ぐ「大」。月は耳の側に行つた「月十去十单耳旁（ふしづくり）〓脚」。

《註》 句ごとに離合法で一文字を解き、合わせて謎底の四字熟語と解く。「好双大脚」は明太祖の皇后を揶揄する俗語。

197

【万用】

宇宙茫々―^①氣清 由来万物尽生成

黎民鼓舞歸王化 四海無争^②賀太平

字四

天地人和

【万書】 〈同〉

①【探精】 浩 ②【探精】 謳歌

《訳》 宇宙は茫々として気が清く「天」、万物がそれに由来し生成される「地」。民が喜び勇んで天子の教化に歸し「人」、天下に争いごとがなく太平を祝う「和」。

《註》 句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。

198

【万用】

三人同日去觀花 百友相交共一家

仇(愁) 恨無心尤不足 夕陽橋下一双瓜

字四

春夏秋冬

【万書】〈同〉

【探精】に二回収録。一回目は「三人同行去觀花、百友元来共一家、禾火二人相對坐、夕陽橋下一双瓜」とあり、二回目は「艷陽天氣滿山花、百友原来為作家、禾火去心尤不足、夕陽留下一双瓜」とある。

《詠》三人が同じ日に花見に出かけた〔春〕。百人と交友して家族のように付き合った〔夏〕。愁恨で心を無くしてもなお足りず〔秋〕、夕日の橋の下に瓜が二個ある〔冬〕。

《註》第一句から第三句は離合法で解く。第四句は字形を視覚的に連想する必要がある。「夕」の点を伸ばして〈橋〉の形を作る。その下に二点(瓜

二個)を置くと、「冬」の字になる。

199

【万用】

無形無影透人懷 万紫千紅闌景開
六出粧成銀世界 一輪皎魄照樓堂

字四

風花雪月

【万書】台

【探精】「無形無影透人懷、四季能吹万物開。六出粧成美景界、一輪皎月照樓台。」

《詠》形も影もなく人の懷をとる〔風〕。色とりどりて美しさを競うように咲く〔花〕。六弁の花々で世界を銀色に化粧する〔雪〕。明るい一輪が樓堂を照らす〔月〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。

〔万用〕

世事悠悠無了期 一生好歹總由伊
縱然金玉如山積 不及蟾宮折桂枝

字四

長命富貴

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》世間の事は悠々として終わりがなく〔長〕、生涯の良し悪しはすべてそれによる〔命〕。たとえ金銀財宝が山のように積んでいても〔富〕、月で桂樹の枝を折ることに及ばない〔桂（貴）〕。《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。第四句は「桂」の同音字の「貴」に置き換える。

〔万用〕

韓信当年曾寄食 後來拜將^①并封王

只因不教^②耆年老 短命而亡在未央

字四

窮通寿夭

① 【万書】 不敬 ② 【万書】 一旦、【探精】 不敬

《訳》韓信はむかし食客だったが〔窮〕、後に将となり王を封じられた〔通〕。ただ年長者に不敬を働いたせいで〔寿〕、未央宮内でその短い生涯を閉じた〔夭〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせて謎底の四字熟語と解く。

〔万用〕

位居万人之上 立在一人之下
分同乾道之尊 出乎双親膝下

字四

君臣父子

203

【万書】〈同〉

【探精】周

《訳》万人の上に位置し「君」、一人の下に立つ「臣」。
乾道の尊みを分かち合い「父」、両親の膝下から
出た「子」。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせ
て謎底の四字熟語と解く。

【万用】

西湖歌舞幾時休 月不明兮水不流
惟有仙人留此迹 五兄五弟共交遊

湖字拆古字

古

【妙錦】〈同〉

《訳》西湖の歌舞はいつになったら休止するのか。

204

月は明るくないし水も流れていない。このような
名跡を世に残せるのはただ仙人のみ。五兄五弟が
つきあってともに遊び楽しんだ。

《註》第一句の「湖」から第二句の「月」と「水（シ）」
を取り除くと謎底の「古」となる。また、第四句
の「五兄五弟」はすなわち「十人」、人を数える
助数詞は「口」であるため、「十」と「口」を組
み合わせても「古」となる。

【万書】

一字十四口 両口成丁両口小

字一

圖

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》一文字に十四の口がある。そのうち二つは
つながっていないくて、二つは小さい。

万書

一人一個口 心「中」懷不朽

字一

恩

《註》「十四の口」を十四個の「口」の字と誤解し
やすいが、実は「十」の字と四つの「口」である。
「十」の字と四つの「口」を組み合わせると、「圖」
にたどりつく。

妙錦

一田茅草乱蓬鬆 呼童十個去耕耘

【妙錦】【竜頭】【探精】〈同〉

《訳》一人に一個の口、心に不朽を抱える。

《註》「一」「人」「口」「心」を組み合わせれば「恩」
の字。

妙錦

草若除時春已暮 只因日短費人工

草字拆日字

日

《訳》田んぼ一面にチガヤが乱れて生えている。
十人の童に耕作させる。除草できた時には春がす
でに暮れ、ただ日が短いため人工を費やした。

《註》第一句の「草」から第二句の「十」と第三
句の「草（艹）」を取り除けば「日」。また、第四
句の「日が短い」を『日』の字より短い」と理
解すれば、同じく「日」の字を想起する。

黄昏鷄向水辺啼 甚人泥土不沾衣
遠見草中羊露角 一心重整旧門楣

字四

酒堪解悶

208

妙錦

十字頭上佳兩点 勸君莫作斗字猜
若作斗字猜 即是假秀才

字一
準

《詛》「十」の上に佳（ただ）二点。「斗」と解く

《詛》黄昏の時、鶏〔酉〕が水辺〔氵〕に向かつて鳴いている〔氵＋酉＝酒〕。甚人（なにびと）の衣なら泥土が付かないのか〔土＋甚＝堪〕。遠くへ見ると草の中から羊が角を出している〔角＋羊＝解（解）〕。一心に古い家門を立て直す〔心＋門＝悶〕。

《註》句ごとに離合法で一文字を解き、合わせて謎底の四字熟語と解く。

ことなかれ。もし「斗」と解いたら、すなわち偽の秀才だ。

《註》点二つに「佳」「十」を加えれば謎底の「準」の出来上がり。つまり、「佳」を「ただ」と読まずに、謎底文字のパーツとして捉えると解ける。

【俗語類】

209

他郷遇故人 〔三台〕

邂逅同君会 乗騎共語談

爾西我東去 急速走陽門

俗語二

相逢不下馬 各自奔前程

【妙錦】〈同〉

《訳》君と邂逅し、ともに馬に乗って話をした。

あなたは西へ、私は東へ、急いで陽門を通った。

謎底…出会ったとしても馬から降りず、各々前途を赴く。

《註》文意の連想で解く。

嘆古 〔三台〕

兩下行兵共一営 丹青把筆到天明

孔明敗則誦兵策 霸王文戦不曾贏

俗語二

共君一夜話 勝読十年書

《訳》兩方兵を率いて兵營を共にし、夜明けまで

絵を描き揮毫した。孔明は敗れば兵策を読み、覇

王〔項羽〕は文章の競い合いで勝ったことがない。

謎底…君と一晩中話していると、十年分の勉強よりも学んだ。

《註》文意の連想で解く。

211

偶題 〔三台〕

十人擡付紙棺材 不説経書便中来

負重一牛耕隴上 江心造起摘星台

俗語二

衆輕易挙 独立難成

【妙錦】〈同〉

《訳》十人〔衆〕で紙の棺桶〔輕〕を担ぐ。経書

を読まずに科挙試験に合格した〔易拳〕。一匹の牛が負重して隴上で耕作する〔独立〕。川の真ん中に高い台を建てる〔難成〕。

《註》句ごとに二文字ずつ連想し、合わせて謎底の諺となる。

対聯 三台

造化兼全痴憎亦能生万貫

仁恩方寸慈悲何用素三餐

俗語二

命好不用乖 心好不要齋

【妙錦】〈同〉

《訳》命と運が両方良ければ無知な人でも億万長者になれる。仁と恩は小さいところから実践するもので、慈悲な心があれば終日菜食する必要がない。

謎底…運命が良ければ機智はいらない。心が善良であれば菜食する必要はない。

《註》文意の連想で解く。

万書

家囊消索住城街 縦有交朋不往来

十万腰纏幽谷处 三千朱履共徘徊

俗語二

貧居鬧市無人識 富在深山有遠親

【探精】〈同〉

【妙錦】珠

《訳》財産が少ない人は城内に住んでいても、友達との付き合いがない。大金持ちには深い山中に住んでも、多くの人が行き来するだろう。

謎底…貧しい人は繁華街に住んでも知人がない。金持ちが山の中に居ても遠い親戚が来る。

214

《註》文意の連想で解く。

〔万書〕

陋巷簞瓢人静昼長無些事
豐衣足食官居貴顯反成愁

俗語二

貧窮自在 富貴多憂

【探精】〈同〉

【妙錦】 箇

《訳》狭くて汚い町で簡素に生活していれば、周りが静かで、昼を長く感じ、何もやることがない。衣食共に満ち足りて、官吏になって高い地位に居ると、かえって憂鬱になる。

謎底…生活は貧しいが自由がある。富貴であるが憂い事が多い。

《註》文意の連想で解く。

215

〔万書〕

言語何曾說汝曹 須教三省將吾度

俗語二

未說他人 先量自己

《訳》あなたたちのことについて話したことがない。自分のことは必ず三省する。

謎底…他人のことを言う前に、先に自分をはかる。

《註》文意の連想で解く。

216

〔万書〕

天生富貴何須巧

俗語一

好命不用乖

《訳》生まれながら富貴であれば巧みになる必要はない。

謎底…運命が良ければ機智はいらない。

《註》文意の連想で解く。

万書

里長罵知県 甲首懼里長

俗語二

不怕官 只怕官

【妙錦】〈同〉

《訳》里長は知県の悪口を言い、甲首は里長を恐れる。

謎底…官を恐れず。ただ官を恐れる。

《註》文意の連想で解く。里長と甲首は里甲制〔明清時代に行われた農村自治制度〕における呼称。

一里は一一〇戸で編成され、そのうち富裕な二〇戸を里長戸、残りの一〇〇戸を甲首戸とされた。毎年里長一人、甲首一〇人が輪番に租税の徴収、

里の治安維持に当たった。

妙錦

観燈須不打緊

製造且費心機

俗語一

看者容易做者難

《訳》燈籠を觀賞するのは大したことではないが、作るのとはそうとう大変である。

謎底…見るのは容易いが作るのは難しい。

《註》文意の連想で解く。

妙錦

遙望青山一派光 家中寂寞又無糧

悶々無言終日想 寡居淨室恨更長

俗語四

無柴 無米 思量 難過

【万書】第四句のみ

《訳》遠くから眺めてみたら青き山は丸坊主であり〔無柴〕、家の中は物が少なく食料もない〔無米〕。悶々と無言で一日中考えて〔思量〕、何もない部屋に一人でいると夜の長さが憎い〔越え難い（難過）〕。

《註》文意の連想で解く。

【事物名類】

220

嘆時 三台

蜀国兵来計已非 至今千載尚含悲
輕薄忽然穿柳巷 橋辺専等売花兒

鳥虫名二

杜宇 蝴蝶

《訳》蜀国に兵が攻めてきてすでに取り返しがない。千年経った今に至ってもなお悲しみを拭えないでいる。軽くて薄い体で忽然と柳のまちを通っていった。橋の隣でただ花売りの子どもを待っている。

《註》文意の連想で解く。ホトトギスの異称である「杜宇」「蜀魂」「不如歸」は、蜀が秦によって滅ぼされてしまったことを知った古蜀国の君主杜宇がホトトギスに変身して嘆き悲しんだという故事に由来する。

221

咏物 三台

挺々丰標染雪霜 平生托跡水雲郷
識破茅君論道処 華表归来日已長

鳥名二

鷺「鷺」 白鶴

《訳》まっすぐに立つ風姿は霜雪に染められ、生涯、風景の清らかな地に身を寄せる。仙人になった茅氏兄弟が道を論ずる場所を知り、華表より帰ってすでに日が長い。

《註》文意の連想で解く。鶴は「仙家の霊鳥」とよく知られている。「華表归来」は道教の仙人丁令威の故事による。

222

懷古 三台

随行曾運蜀君糧 燒尾齊城一陣強
蜀道不通因爾鑿 東風纔起苦鞭戕

獸名四

木牛 火牛 金牛 土牛

《訳》かつて軍に随行し蜀の兵糧を運んだ。尻尾に火をつけて一斉に敵陣へ走り込んだ。不通だった蜀道はなんじのために開鑿された。東風がわずかに吹きはじめて辛抱強く鞭を打つ。

《註》「木牛」はすなわち諸葛亮の創案という、牛馬の形に似た機械仕掛けの兵器・食糧運搬車。第二句は『史記・田单伝』の「火牛の計」による。第三句は『蜀王本紀』「石牛糞金」の故事による。第四句は『魏書・鄧艾伝』「獼猴騎土牛」による。

223

閑咏

三台

船翻笛子滿湖浮 戦負將軍棄甲逃
赤壁洲頭栖冷夜 暁看露結盖征袍

菓名四

海飄硝（海鰲蛸）

敗醬 宿砂仁 砒霜

【燕台】〈同〉
【妙錦】【竜頭】軍兵
【万用】【万書】第一句なし、「不勝將軍棄甲逃。赤壁洲頭栖過夜、暁来帶露掛征袍」とある。

《訳》船が転覆し笛が湖一面に浮かんた〔湖↓海、浮↓漂（鰲）、笛↓簫（蛸）〕。戦で負けた將軍は鎧を捨てて逃げた〔敗將（醬）〕。冷たい夜に赤壁の洲浜に野宿し〔宿砂人（仁）〕、朝になって戦袍が朝露に覆われているのを見た〔披（砒）霜〕。
《註》文意の連想で解き、一部の文字を同音字に置き換える。

224

対聯

三台

一幅鸞箋拆開中無半個字

数行雁陣伝来果是一封書

葉名二

白芷 信石

《訳》一枚の便箋を開いて見たら、中には一文字

もない〔白紙（芷）〕。数羽の雁が陣を作って運んできたのはやはり一通の手紙だ〔信実（石）〕。

《註》文意の連想で解き、一部の文字を同音字に置き換える。

225

友誼

〔三台〕

我向君家尋自家 自家先得君家

君家不説自家事 見了君家見自家

物一

鏡

【妙錦】〈同〉

226

《訳》私は君に向かって自分を探す。自分は先に

君のところに行く。君は自分のことを話さない。

君に会えば自分に会う。

《註》文意の連想で解く。

言志

〔三台〕

平生抱負許多才 願逞英豪吐出来

滿紙文光收不住 夜来耿耿逐三台

一物

起「衝」天箭

《訳》平生たくさんの才能を持っており、英豪ぶっ

て吐き出したい。文才が紙面に収まらず、夜になると明るく三台星を追う。

《註》文意の連想で解く。

述懷 三台

本是江南一老叟 身辺有個量天斗
 能推貴賤与高低 軀豁須憑三分口
 誠実君子請歸来 輕薄小人急逐走
 若還不信且回家 明朝另請人分割

物一

風車

《訳》もとは江南の翁が一人、天を量る斗を持つている。貴賤や高低を推し量ることができ、転運するにはかならず三分の口を頼る。誠実な君子は呼び戻し、軽薄な小人は急いで追い払う。もしまだ信じられないならとりあえず家に帰って、明日にはほかの人に見てもらおう。

《註》文意の連想で解く。玩具の風車は民間信仰において運氣の流れを変える縁起物として知られている。

自咏 三台

生身潔淨心又聡 欲逞英雄路未通
 有志金鸞呈表策 無能辺塞立奇功
 指日竜頭持拔起 擬將心事献重瞳

物一

筆

《訳》身が潔白で心が聡明である。英雄の才能を誇示したいが道は通っていない。官吏になって献策すると志すが、辺境で奇功を立てる能力はない。近いうちに状元として拔擢されれば、衷心を聖君に献じたい。

《註》文意の連想で解く。

述古 三台

昔日人称虞世南 胸藏万卷好児郎
 誰知思邈留仙跡 遺下当年一鉄航〔杭カ〕

230

物二

書櫥 藥碾

《訳》 虞世南という昔の人は、学問に優れるいい男だった。孫思邈は仙跡を残し、当時使っていた鉄くいを落とした。

謎底…本箱／書棚、薬研

《註》 文意の連想で解く。虞世南は唐代の書家・政治家。孫思邈は唐代の医者・道士、後世に仙人として尊崇された。

自咏

三台

自從煅煉到如今 費尽先生一片心
常倚東方星斗照 朝々台上見君臣

物一

鋤薬刀

231

述志

三台

《訳》 鍛錬されてから今に至って、先生が苦心を費やしてくれた。いつも東の星に照らされるおかげで、毎朝台の上で君臣と対面する。

謎底…薬草切り

《註》 文意の連想で解く。東の星は道教において「木」を司る。

解神在命得安康 縦有関時也不妨
若遇正官並正印 經由險地又何傷

物一

路引

《訳》 解神〔災厄を祓う神〕が命に在れば安寧を得られる。たとえ難関が立ちはだかつていても構わない。正官と正印に逢えば、危険な境地を通過しても悪い影響を受けないだろう。

《註》「正官」「正印」は民間信仰における占いの用語である。謎面は占いのことを書いているように読めるが、第二句の「関」を「通行人検問所」、第三句の「正官並正印」を「関所での正式な手続き」、第四句の「險地」を「危険な地」と理解すれば、謎底の「路引（道しるべ）」にたどりつく。

咏月 三台

当空皓魄出塵寰 対面無言楷笑顔

広寒昨夜風淡蕩 掛懸壁上映鳴鸞

物一

鏡

《訳》月は塵寰〔世俗の世〕から出て中天にかかった。笑顔で無言に向かい合った。昨夜、広寒〔月の宮殿〕には風がのどかに吹いていて、〔顔が〕壁に掛かっている銅鈴に映されていた。

《註》文意の連想で解く。

衰将 三台

身披金甲氣昂々 凜々威風誰敢当

腹内無能難赴敵 皇王勅命禦関防

物一

門神

《訳》金の鎧を身にまとい、あふれている。威風凛々にして誰も遮ることができない。腹の中が無能で敵陣に赴くのは難しいが、皇帝の勅命を受け、関所と要塞を守る。

謎底…魔除けのために門扉に貼る神像
《註》文意の連想で解く。

咏述 三台

生来短短両身材 鴛鴦配合任拘推

只因素手愁添滿 教奴展轉淚盈顚

物一

磨子

【妙錦】「生下短矮兩身材、鴛鴦配合任拘推。只因毒手愁堆積、交人展轉淚盈顚。」謎底は「石磨」に作る。

《詠》生まれながら二人とも背丈が短い。鴛鴦のように力を合わせて止まっても推してもいい。ただ白い手が憂愁を満ちあふれるほど盛り付けたため、わらわはくるくる回らされ、涙があごから零れたのだ。

謎底…碾き臼

《註》文意の連想で解く。

235

偶題

三台

身帶銅鑼非鋪（鋪）兵 小々葫蘆繫在身

周天星斗羅吾背 能与幾人分重輕

物一

釐等

【妙錦】〈同〉

《詠》銅鑼を持っているが通信兵ではない。小さな瓢箪を身に着けている。満天の星を背に集め、何人と重軽を分別できるか。

謎底…りんばかり（釐（厘）を使って金銀などを量る竿秤）

《註》文意の連想で解く。

236

自述

三台

大胆欺天不怕愆 横遮人眼聳双肩
応無果報与人見 改姓埋名做幾般

物一

傘

《訳》大胆に天を欺き、罪を恐れない。横から人目を遮り、両肩をそびやかす。人に会う果報などないはずなのに、どうして苗字を変え、名を伏せてしまうのか。

《註》文意の連想で解く。第三句・第四句と謎底の関係は未詳。

咏夫婦 三台

上和下睦 夫唱婦随

有情有意不相離 口唧絲錦之類

物一

剪刀

《訳》上も下も和睦していて、夫の言うことに妻は従う。愛情があつて離れず、口には絹や錦の類を銜えている。

謎底…ハサミ

《註》文意の連想で解く。

偶題 三台

遠觀似真形 近敲不做声

不堪走赴敵 隱逸伴閑人

物一

石鼓木

【妙錦】〈同〉

《訳》遠くから見れば本物の形に似ていて、近くで叩くと音はしない。敵陣へ赴くのは難しいが、隠れ住んで閑人の伴となる。

謎底…抱鼓型門石

《註》文意の連想で解く。

239

修真 三台

能明万事在心機 失却心兮不明矣
若能発却心頭火 天地昭彰不昧形

物一

燭

【妙錦】〈同〉

《訳》心の動きで万事に明るい。心を失えば明るさを失う。心の火をことごとく発することさえできれば、どんな物でも隠されることなく、天地を照らすだろう。

《註》文意の連想で解く。「心」を蠟燭の「芯」と理解する。

240

述志 三台

各抱錦秀才 紛々入場屋
経綸事業成 不幸叨湯沐

自纏自縛棄残生 因甚心中常不足

物一

蚕繭

【妙錦】来

《訳》各々錦繡の才を抱えて、続々と部屋に入った。経綸の事業を完成したが、不幸にも熱湯を浴びせられた。自縄自縛して余生を捨て、何のために心の中がつねに満足しないのか。

《註》文意の連想で解く。熱湯につける工程は繭の糸を取るためにある。

241

偶題 三台

少時青々老日黄 幾多辛苦得成双
欲随遊子天涯去 奈被傍人説短長

物一

草鞋

《訳》若い頃は青々としていて、年を取ると黄色くなる。たくさんさんの辛苦を経てようやく対となる。旅人とともに遠い異郷に行きたいが、いかにせん周りの人に難癖をつけられる。

《註》文意の連想で解く。

有感 三台

天生此物巧機多 織尽綾羅不用梭
独自一身供一口 一身無奈一身何

物一

蜘蛛

【万書】【探精】一

《訳》生まれながら巧みな技を多く持っている。綾羅を織りつくすのに梭は要らない。ただ体一つに口一つ、やむなくひとりであるしかない。

《註》文意の連想で解く。

適興 三台

擾々宮々去復回 逐類呼群趁熱来
凝墨点屏彈不去 擲毫揮劍送難開

物一

蠅

《訳》がやがやと行き来して、類を追い群を呼び熱いうちに来る。屏風に付いた墨の滴のように弾いても離れないし、筆を投げて劍を揮っても追いつくことが難しい。

《註》文意の連想で解く。

題盜 三台

小寇鳴鑼幕下存 磨牙吮血待黄昏
身細脚長随夏至 燕王一到便騰雲

245

物一

蚊

《詠》小さい盗賊が銅鑼を鳴らし帳幕の下に現れる。牙を磨き血を吸い黄昏時を待つ。身は細くて足は長く、夏とともに到来する。燕王が来たらすぐに雲に乗って飛んでいく。

《註》文意の連想で解く。第四句と謎底の関係は未詳。燕王とは明の永楽帝のことか。

遣興

〔三台〕

天生一对好夫妻 暮々朝々永不離

有時一旦分別散 也被傍人說是非

物一

笏子

《詠》天成のいい夫婦で、四六時中一緒にいて離

246

れない。たまに方々に分かれていたら、周りの人にとにかく言われる。

《註》文意の連想で解く。「笏子」は「跋杯」などともいう。半月形の竹製または木製の占い道具であり、通常二個セットで床に投げて使用する。落ちた状態（どの面が上かなど）で吉凶を占う。

〔燕台〕

佳人撲臉淡施粧 揭鏡無痕淨且光

鬟上謾栽黄色菊 頻將鉛翠画眉郎

藥名四

輕粉 銅青 剪金花 青黛

〔妙錦〕〈同〉

【竜頭】句の排列が異なる。

《詠》佳人が顔におしろいを付け軽く化粧した〔輕粉〕。鏡を取って見ればキズがなくつやつやであ

る「銅青」。いたずらに黄色い菊の花を鬢にさして「剪金花」、眉を描いてくれる夫はよく白粉とまゆずみを買ってくる「青黛」。

《註》句ごとの文意から薬名を一つ連想する。

燕台

水上浮来一片磚 一个鷄蛋抱三年

孩兒又怕爹娘打 八十婆々独自眠

花名四

石榴花 芙蓉花 紫荊花 牡丹花

【妙錦】 第一句のみ 【探精】 前の二句のみ

【万書】 【探精】 卵

《訳》一枚の磚が水に浮いて流れてきた「石流（榴）」。一個の卵を三年間抱く「孵冗（芙蓉）」。子どもは両親にぶたれるのが怖い「子驚（紫荊）」。八十の婆さんが一人で寝る「母単（牡丹）」。

《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の二文字を連想する。一部の文字は類音字に置き換える。

燕台

昭君出塞玉容嬌 却怕飛埃碎石搖

搽抹謾敷鉛黛翠 終朝粧罷自無聊

花名四

芙蓉花 金沙花 荼蘼花 茉莉花

《訳》昭君が国境から出た時は花のかんばせだった「婦容（芙蓉）」。ただ飛んでくる塵埃と石の粒が怖かった「驚（金）沙」。いたずらに白粉をつけ眉を描き「塗眉（荼蘼）」、化粧を終えるとひとりでに終日手持ち無沙汰「漠麗（茉莉）」。

《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の二文字を連想する。一部の文字は類音字に置き換える。

249

燕台

鶏唱行人去

果名一

棗

【万書】【妙錦】【探精】「鶏唱行人就去」

《訳》鶏が鳴くと旅人は出立する「早（棗）」。

《註》文意から一文字を連想し、同音字に置き換える。

250

燕台

剛刀細薄裁

果名一

葛

《訳》堅い刀で細く薄く切る「割（葛）」。

《註》文意から一文字を連想し、類音字に置き換

251

燕台

金丸甜味美

果名一

柑

《訳》黄色く丸く、甘くておいしい。

《註》「黄色く丸い」で形を表し、「甘」を同音字の「柑」に置き換える。

252

燕台

従今去不回

果名一

桃

【万書】【妙錦】【探精】「従今走去不回」

《訳》 今からここを去って二度と帰らない〔逃
(桃)〕。

《註》 文意から一文字を連想し、同音字に置き換
える。

253

燕台

一旦成抛撇

果名一

梨

《訳》 ひとたび放り投げてしまう〔離(梨)〕。

《註》 文意から一文字を連想し、同音字に置き換
える。

254

燕台

為人好多事

果名一

櫓

《訳》 余計な世話を焼きたがる〔攪(櫓)〕

《註》 文意から一文字を連想し、同音字に置き換
える。

255

燕台

雨中粧点望中黄 侍立深山分外長

廊廟之材応見取 家々織就綺羅裳

樹名四

槐樹 楓樹 柏樹 桑樹

《訳》 雨の中に黄色くいろどりを添える。奥山で
侍立してことのほか久しい。廊廟の材として取ら
れるべし。家々に美しい衣服が織り上げられる。

《註》 文意の連想で解く。第一句は白居易『秘省
後聽』の「槐花雨潤新秋地」、第二句は杜牧『山行』

256

燕台

の「車停坐愛楓林晚」をそれぞれ取り入れている。
槐の花は黄色い。柏は廟堂の建築材としてよく知
られている。蚕は桑の葉で飼育する。

宰相堂々沐聖恩 四季長青無凋敗

四時不改旧家風 一年独占春魁首

樹名四

桂樹 松樹 竹 梅樹

《詠》宰相、堂々にして聖恩にあずかる。一年じゅ
う枯れずに常緑し、衰えを見せない。四季におい
て昔ながらの家風を改めることなし。毎年の春の
魁を独占する。

《註》文意の連想で解く。『晉書・郗詵伝』「桂林
之一枝、昆山之片玉」の語から転じて、唐以降、
進士の試験に首席で合格することを「折桂」とい

257

万用

う。松は常緑樹の代表、竹は曲がらずまっすぐな
性質を持っているため、草木の中の君子として讃
えられる。梅は早春で最初に花を咲かせるものと
知られている。

一幅花箋決不欺 相煩寄於我孩児

休図自己營生計 須識高堂白髮稀

薬名四

信石 附子 独活 知母

【万書】【探精】〈同〉

《詠》美しい便箋一枚、決して偽りのことばはな
い〔信実（石）〕。我が子に送ってちょうだい〔附
子〕。〔手紙の内容〕一人で生計を立てようとしな
いで〔独活〕、親が白髪も薄くなるほど年を取っ
ていることを忘れないで〔知母〕。

《註》文意の連想で解く。一部の文字を同音字に置き換える。

258

【万用】

医生舖裏尽皆空

薬名一

没薬

【万書】【探精】〈同〉

《訳》医者のみせに何もかもが売り切れた。

《註》文意から「薬がない＝没薬」と連想する。

259

【万用】

修寄音書無筆踪

薬名一

白芷

【探精】休

《訳》手紙をしたためて送ったというのに字が書かれていない。

《註》文意から「白紙」を連想し、「紙」を同音字の「芷」に置き換える。

260

【万用】

船行水急帆休掛

薬名一

防風

【万書】【探精】〈同〉

《訳》水流の激しいところで船を進めるときは帆を掛けないで。

《註》文意の連想で解く。

261

〔万用〕

江上乘騎赴水潮

薬名一

活石

【万書】【探精】〈同〉

《訳》雨が止んだ道端で一人の翁が転んだ。

《註》明清時代の街の道は石板で敷かれたものが多く、「滑る石」という意味で「滑石」（「活石」ともいう）と解く。

262

〔万用〕

江上乘騎赴水潮

薬名一

海馬

【万書】〈同〉

263

〔万用〕

秀才身上帶馱草

薬名一

香薷

《訳》川の上で乗って潮に赴く。

《註》文意の連想で解く。

【万書】〈同〉

《訳》秀才が香草を身に着けている。

《註》「秀才」から連想した「儒」を同音字の「薷」に置き換える。

264

〔万用〕

黑夜冰人強説婚

薬名一

烏梅

【万書】〈同〉

《訳》 暗い夜中に仲人がむりやり見合い話をする。

《註》 「黒」で「烏」、「見合い話」で「媒」を連想する。「媒」を同音字の「梅」に置き換える。

【万書】

客人途裏想家郷

鳥名一

鷺鷥

【探精】〈同〉

《訳》 旅人は道中で故郷を想う。

謎底…コサギ

《註》 文意から「路思」を連想し、類音字の「鷺鷥」に置き換える。

【万書】

二八佳人巧様粧

鳥名一

画眉

【探精】〈同〉

《訳》 十六の佳人が巧みに化粧する。

謎底…ホオジロ

《註》 文意から「眉を描く」を連想し、鳥の名に置き換える。

【万書】

一株古木都無葉

鳥名一

老鴉

【探精】〈同〉

268

《詠》 一本の古木、葉が一枚もない。

謎底…カラス

《註》 元・馬致遠『天浄沙・秋思』の名句「枯藤老樹昏鴉」による。

〔万書〕

算来六十四年長

鳥名一

八哥

【探精】〈同〉

《詠》 数えてみれば六十四年経った。

謎底…ハツカチヨウ

《註》 六十四と八の関係からすると、「八卦」の「卦」を類音字の「哥」に置き換えて解くものと推測されるが、確信はない。

269

西江月 〔万書〕

日裏潜蔵収跡 夜来遊蕩飛揚

滿天星斗煥文章 曾伴君王路上

雨打風吹不滅 燈前月下無光

窓前曾伴讀書郎 不比尋常模樣

虫名一

蛩

【探精】〈同〉

【妙錦】 斂

《詠》 昼間は姿を消し、夜になるとゆらゆらと飛び回る。満天の星が文章を光らせ、かつては君王に付き添った。雨に打たれても風に吹かれても明かりが消えないが、燈台や月の下では光らない。昔、窓際で相伴した学郎は、普通の人とは違っていた。

《註》 文意の連想で解く。唐・杜牧『秋夕』など

有名な閨怨詩によって、蛩は君主の寵愛を失った宮女の寂しさ（文人の失意）を象徴するものとして知られている。最後の二句は晉の車胤が蛩を集めてその光で書を読む故事を取り入れている。

【万書】

打鼓吹簫入洞房 紅羅帳裏戲鴛鴦

只因貪恋顔和色 不顧無常見閨王

虫名一

蚊

【探精】〈同〉

【妙錦】愛

《訳》鼓を打ち鳴らし簫を吹きながら寝室に入り、赤い帳の中で鴛鴦の戯れをする。美貌に執着するばかりに、無常〔死者の魂を地獄に送る鬼神〕を顧みずに閻魔王のもとにいく。

《註》文意の連想で解く。

【万書】

脱了紅袍愁又愁 剛刀碎割不停留

鮮血不知何処去 許多骸骨撒街頭

果名一

甘蔗

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》赤い袍を脱がされ苦しみが絶えず、堅い刀に止まることなく細かく切られる。鮮血はどこへ流したか分からずに、たくさん骸骨が道端で散らばった。

謎底…さとうきび

《註》文意の連想で解く。

【万書】

273

緑絹結楼台 弟兄十五六

雖是共娘生 各人独自宿

果名一

蓮蓬

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》緑の絹で楼台を結んでいる。兄弟は十五六人いる。同じ母から生まれたのに、各々一人で住んでいる。

謎底…ハスの花托

《註》文意からハスの花托の構造を連想する。

【万書】

屠子削骨不干浄

果名一

蓮肉

274

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》肉屋さんが骨をきれいに削らなかった。

《註》文意で「肉がついている」連肉を連想し、

「連」を同音字の「蓮」に置き換える。

【万書】

不去読書卧小窓

果名一

欖仁

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》勉強せずに窓辺で横になる。

《註》文意で「怠け者」懶人を連想し、同音字の「欖仁」に置き換える。

【万書】

五徳兼全更羨頂門有彩

275

百川俱会須誇艷麗無双

花名二

鷄冠花 海棠花

【妙錦】 【探精】 〈同〉

《詠》五徳（温・良・恭・儉・讓）をすべて備えていて、門の上を色とりどりの絹で飾られている。多くの河が合流し艷麗無双と讃えるべし。

《註》文意の連想で解く。「頂門」は「頭のとっぺん」という意味もあるため、鷄冠を連想する。「百川俱会」で「海」、さらに、「一堂に会する」で「堂」を連想し、同音字の「棠」に置き換える。

276

【万書】

山居不記春与秋 扶依此物度年流
不要人間更歲月 但願皇王万々秋

物一

皇曆

【妙錦】 〈同〉

【探精】 相

《詠》山に住んでいると月日が分からなくなるから、この物に頼って年の流れをはかる。世の中の歳月が変わらずに、ただ皇帝の治世がいつまでも続くことを願う。

《註》文意の連想で解く。皇歴は「黄歴」ともいう。吉凶宜忌を説く中国の伝統的な行事歴である。

277

【万書】

蟾宮一口小明塘 一枝鉄箭射南方
二十四条花巷走 巷々能会做文章

物一

羅経

278

【妙錦】〈同〉

《訳》月に小さな明るい池があり、一本の鉄の矢が南に射られている。二十四本の花巷を歩き、どの巷も文章の達人がいる。

謎底…羅針盤

《註》文意から羅針盤の形を連想する。

【万書】

本是地藏出世 巧製一団円器
身体方纔得乾 便有傷人之意

物一

彈子

【妙錦】和氣

《訳》もともとは地藏が世に現れ、丸い道具を巧みに作った。体が陽の氣を受けたばかりなのに、人を傷つける意図を持った。

279

謎底…彈丸

《註》文意の連想で解く。

【妙錦】

農事時当五月中 邀兄插蒔用耕耘
扶犁引犢連兎出 牯犍勤勞卧隴雲

藥名四

半夏 昆布 牛旁子 牛膝

【竜頭】句の排列が異なる。

《訳》農事は五月に行うべし〔半夏〕。兄〔昆〕を誘って田植えをする〔（苗を）配置する↓布〕。小牛を曳いて犁（うしぐわ）に手を添え、子どもを連れ出す〔牛旁子〕。牝牛も牝牛もよく働いて田んぼのほとりに臥す〔牛膝（を折って腹ばいに）〕。

《註》文意で漢字を連想し、薬名にたどりつく。

妙錦

憶昔倉惶別意長 与君執手上河梁
家書昨得迢遙達 遺下寒衣附僕郎

葉名四

蒺藜 連喬 遠至 劉寄奴

【竜頭】句の排列が異なる。「惜」

《訳》昔恋人と慌てて分かれる時のことを思い出す〔記離（蒺藜）〕。君の手を取って橋を登った〔連喬（喬）〕。手紙は昨日遠い地に到着した〔遠至〕。冬服を残して召使に送った〔留（劉）寄奴〕。
《註》文意で漢字を連想し、一部を同音字に置き換えれば、葉名にたどりつく。

妙錦

雲雨來時我独当 黄昏兩々入蘭房

奈何一旦肝腸断 棄旧迎新撇路傍

物一

草鞋

《訳》雲雨が来たら私が引き受ける。夕暮れ時に対になって閨房に入る。いかんせん断腸してしまえば、古いものは道端に捨てられ、新しいものが迎えられる。

《註》文意の連想で解く。

妙錦

有情即棄我 無情我伴郎
伴郎雲雨後 棄却在門旁

物一

雨傘

《訳》情があっても私はすぐに捨てられ、情がな

283

くても私はあなたに付きそう。雨が去るまでお供した後、門辺に捨てられる。
《註》文意の連想で解く。

妙錦

蔡倫功造白玉城 裏頭軍馬外分明
夜来等待烟墩発 呉兵征伐楚齊人

物一

走馬灯

《訳》蔡倫が功を立て白玉の城を造った。中にある軍馬は外からはつきりと見える。烽火が起こる夜まで待てば、呉の兵が楚と齊を征伐する。

《註》文意の連想で解く。蔡倫は紙の発明者としてよく知られている。

284

妙錦

285

二十年前出富家 至今零落甚堪嗟
請客未至先尋我 吃尽塩油醬醋茶

物一

抹棹布

《訳》二十年前に金持ちの家から生まれたが、今は落ちぶれて嘆かわしい。人は客が来る前にまず私を探し、私は塩・油・醬・醋・茶、すべて味わった。

謎底…食卓拭き

《註》文意の連想で解く。

妙錦

我有一張琴 絃藏在其腹
昭君馬上彈 彈尽天下曲

物一

墨斗

《訳》私は琴を一張持っている。琴弦はその腹に隠されている。王昭君が馬上でそれを弾き、世の中の曲を弾き尽した。

謎底…すみつぼ

《註》文意からすみつぼの構造を連想する。

286

妙錦

千里隨身不恋家 不貪酒飲不貪花
水火刀兵都不怕 日落西山不見他

物一

人影

《訳》千里を行っても付いてきて、家にはまったく未練がない。酒にも花にも執着しないし、いかなる災厄と戦禍も恐れないが、日が沈むと姿が見

えなくなる。

謎底…人の影

《註》文意の連想で解く。

287

妙錦

小小一箇身材 生来不惹塵埃
家住一泓秋水 被人換（喚）作嬰孩

物一

瞳人

《訳》体は小さいが、生まれながら塵をつかない。秋の清らかな水に住み、人に赤ん坊と呼ばれる。

《註》文意の連想で「瞳」と解く。第四句は「童」を同音字の「瞳」に置き換える。

288

妙錦

飄々細雨洒南窓 宵掩重門緊閉房

自嘆分鸞傷柳別 牽衣難捨挽遊疆（續）

花名四

潑雪花 夜合花 梨花 石榴花

《訳》細雨がひらりと南窓に零れ落ち〔潑雪（雨の誤記か）〕、夜に家じゅうの門を閉じ部屋をたてきった〔夜合〕。柳を折って夫と離れ離れになったことを一人で嘆き〔離（梨）〕、服を引っ張るほど別れるに忍びなくて馬の手綱を引いた〔施留（石榴）〕。

《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の文字を連想する。一部の文字は類音字に置き換える。

妙錦

放火焼林不是火

葉名一

紅花

《訳》火を放ち林を焼いたのは火ではない。

《註》文意からベニバナの群生を連想するものか。

謎底リスト

【書句類】

- | | | | |
|----|--------|---------|-----------|
| 1 | 諫行言聽 | 膏沢下於民 | 有故而去 |
| 2 | 不仁不智 | 無礼無義 | |
| 3 | 流連荒亡 | | |
| 4 | 治則進 | 乱則退 | |
| 5 | 事君数 | 斯辱矣 | |
| 6 | 事君尽礼 | 人以為諂也 | |
| 7 | 鳥之将死 | 其鳴也哀 | 人之将死 其言也善 |
| 8 | 見其生 | 不忍見其死 | 聞其声 不忍食其肉 |
| 9 | 足食足兵 | 民信之矣 | |
| 10 | 君子有三畏 | 畏天命 | 畏大人 畏聖人之言 |
| 11 | 晦盲否塞 | 熹自早歲 | 為兒嬉戲 天地懸隔 |
| 12 | 草木生之 | 禽獸居之 | |
| 13 | 学而時習之 | 不亦悦乎 | |
| 14 | 怪力乱神 | | |
| 15 | 放之則弥六合 | 卷之則退藏於密 | |
| 16 | | 天運循環 | 無所逃罪 |
| 17 | | 則其書雖存 | 而知者鮮矣 |
| 18 | | 前王不忘 | |
| 19 | | 日々新 | |
| 20 | | 十目所視 | |
| 21 | | 視而不見 | 听而不聞 |
| 22 | | 食而不知其味 | |
| 23 | | 亡人無以為宝 | |
| 24 | | 財聚則民散 | 財散則民聚 |
| 25 | | 生之者衆 | |
| 26 | | 災害並至 | |
| 27 | | 以天下之大聖 | 行天下之大事 |
| 28 | | 巨細畢舉 | |
| 29 | | 其味無窮 | |
| 30 | | 至死不変 | 死而不厭 |
| 31 | | 去讒遠色 | |
| 32 | | 隱惡而揚善 | |

33 學而第一
 34 學而時習之
 35 道不行 乘桴浮於海
 36 發憤忘食 樂以忘憂
 37 於吾言無所不悅
 38 去喪無所不佩
 39 勇者不惧
 40 不為酒困
 41 似不能言者
 42 事君能致其身
 43 與朋友交言而有信
 44 三軍可奪帥也 匹夫不可奪志也
 45 有事弟子服其勞 有酒食先生饌
 46 夏日則飲水 冬日則飲湯
 47 憂民之憂者 民亦憂其憂
 樂民之樂者 民亦樂其樂
 48 為其殺是童子而征之

49 周旋中規 折旋中矩
 50 內作色荒 外作禽荒
 51 乾道成男 坤道成女
 52 陟彼崔嵬 我馬虺隤
 53 夜行以燭 無燭即（則）止
 54 惟樂戲語（談） 莫思古道
 55 聞人之善疾（嫉）之 聞人之惡揚之
 兩家同（各）生子 賢愚同一初
 一為公与相 一為馬前卒
 56 知己知彼 百戰百勝
 57 何遵約法
 58 樂殊貴賤
 樂殊貴賤 礼別尊卑
 59 樂殊貴賤
 60 綺迴漢惠 說感武丁
 61 弦歌酒宴

【古文類】

76	千家詩	77	明心宝鑑
75	蒙求	78	洪武正韻
74	対類	79	十九史
73	大学 中庸 論語 孟子	80	居家必用
72	礼記	81	夢書
71	春秋	82	通書
70	易経	83	本草
69	書経	84	棋勢
68	詩経	85	夢書
【書名類】			
67	節義廉退		
66	坐朝問道 垂拱平章		
65	多士是寧		
64	府羅将相		
63	孤陋寡聞		
62	器欲難量		
【大明律類】			
86	沉溺公文 私造印信 越渡関津 私船下海		
87	擅起官軍 主将不固守		
88	脱漏戸口		
89	妻妾失序 尊卑為婚		
90	弁問（明） 冤枉 同姓為婚 棄親之任		

91 飛報軍情

92 上（褻）沆神明

【官名類】

93 兵備

94 司徒

95 春坊

96 招討

97 探花

98 員外

99 同知

100 給事

101 繡衣

102 待詔 參議

103 學正 教諭 同知 經歷

助教 博事（士）

【地名類】

104 鳳翔府 吉安府 重慶府 開封府

105 雷州 高州 湖州 通州

106 天台縣 汶上縣 彭澤縣 河陽縣

107 興國州 武寧州 新建縣 進賢縣

108 重慶府

109 吉安府

110 保寧府

111 貴州 饒州 池州 瑞州

112 建陽縣 候官縣 貴溪縣 紹安縣

【人名類】

113 孫權 孔明 子思 呂望

114 伊川 山濤 陶潛 謝安

115 閔羽

116 張飛

117 韓信

- 118 顔回
 119 閔子
 120 樊噲
 121 子思
 122 孟子
 123 子貢
 124 霸王
 子夏
 子張
 子游
- 125 臨行時掇賺人的巧舌頭 指歸期約定在九月九
 126 人迢々書未歸
 127 朱顏非故 綠雲懶去梳 奈画眉人遠 傅粉郎去
 128 親衰老 妻女嬌 万里関山音信杳
 129 詩家清景在新春
 130 只恐夜深花睡去
 131 春色惱人眠不得
 132 有約不來過夜半
- 133 日暮詩成天又雪
 134 夜深微雨醉初醒
 135 皓魄当空曉鏡昇
 136 銀漢無声轉玉盤
 137 一年好景君須記 今日花開又一年
 138 洛陽三月春如錦 多少功夫織得成
 139 閑坐小窓說周易 不知春去幾多時
 140 但逢佳節約重陪
 141 忍餓担飢何日了
 142 孩兒一去無音耗
 143 指下余音不似前
 144 更深背母
 145 道院迎仙客 書堂隱相儒
 146 庭栽棲鳳竹 池養化龍魚
 147 天子重英豪
 148 家無讀書子
 149 成名天下知

150 蝴蝶夢中家万里
151 杜鵑枝上月三更
152 謝却海棠飛尽絮
153 無月不登樓
154 水遠山長処々同

【曲牌類】

155 伝言玉女 誤佳期 羅帳裏坐 憶秦娥
156 步々嬌 惜奴嬌 憶多嬌 上馬嬌
157 鋪地錦 怨相思 傍粧台 望遠行
158 惜奴嬌 泣顏回
159 燒夜香 歸朝歡 夜行船 瑞鶴仙
160 三学士 朝天子 集賢賓 醉扶歸
161 生查子 好事近 金錢花 集賢賓
162 錦堂月 誤佳期 耍孩兒 鮑老催
163 香柳娘 醉娘兒
164 繫人心 綉停針 意不尽 懶画眉

165 石榴花
166 臘月梅

【骨牌名類】

167 蘇秦佩劍
168 楚漢爭鋒
169 十月底小陽春
170 七星劍
171 鐘旭抹額

【字謎類】

172 君子不器
173 項字拆一字
174 勝字拆夫字
175 騰字拆夫字
176 戰字拆「田十」（卑）字
177 朱字拆犢字
178 春字拆泰（秦）字

195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179

極 晶 悲歡離合 門 龍 仁義礼智 忠孝〔廉〕〔節〕 富貴貧賤 言行（徳） 工容 風花雪月 天官賜福 勤謹和緩 秋字拆栗字 儒字拆耍字 斗字拆个字 時字拆肘字 正字拆肯字

210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196

共君一夜話 相逢不下馬 各自奔前程 勝説十年書 準 酒堪解悶 草字拆日字 恩 圖 湖字拆古字 君臣父子 窮通寿夭 長命富貴 風花雪月 春夏秋冬 天地人和 好双大脚

〔俗語類〕

211 衆輕易拳 獨立難成
 212 命好不用乖 心好不要齋
 213 貧居鬧市無人識 富在深山有遠親
 214 貧窮自在 富貴多憂
 215 未說他人 先量自己
 216 好命不用乖
 217 不怕官 只怕官
 218 看者容易做者難
 219 無柴 無米 思量 難過
 220 杜宇^{ホトトギス} 蝴蝶
 221 鷺〔鷺〕（コサギ） 白鶴
 222 木牛 火牛 金牛 土牛
 223 海飄硝（海螵蛸） 敗醬 宿砂仁 砒霜
 224 白芷 信石
 225 鏡

226 起〔衝〕 天箭
 227 風車
 228 筆
 229 書櫥、藥礪（本箱／書棚、藥研）
 230 鋤藥刀（藥草切り）
 231 路引（道しるべ）
 232 鏡
 233 門神（魔除けのために門扉に貼る神像）
 234 磨子（碾き臼）
 235 釐等（りんばかり）
 236 傘
 237 剪刀（ハサミ）
 238 石鼓木（抱鼓型門石）
 239 燭
 240 蚕繭
 241 草鞋
 242 蜘蛛

259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243

白芷
 没薬
 信石
 桂樹
 槐樹
 欖
 梨
 桃
 柑
 葛
 棗
 芙蓉花
 石榴花
 輕粉
 筵子
 蚊
 蠅
 (半月形の竹製または木製の占い道具)
 銅青
 剪金花
 青黛
 芙蓉花
 紫荊花
 牡丹花
 金沙花
 茶藨花
 茉莉花
 柏樹
 桑樹
 楓樹
 松樹
 竹
 梅樹
 独活
 知母

276 275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260

皇曆
 鷄冠花
 欖仁
 蓮肉
 蓮蓬
 甘蔗
 蚊
 蛭
 八哥
 老鴉
 画眉
 鷺鷥
 烏梅
 香薷
 海馬
 活石
 防風
 (吉凶宜忌を説く中国の伝統的な行事曆)
 海棠花
 (さとうきび)
 (ハスの花托)
 (ホオジロ)
 (コサギ)

289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277

羅針盤

彈子（彈丸）

半夏 昆布 牛旁子 牛膝

蒺藜 連喬 遠至 劉寄奴

草鞋

雨傘

走馬灯

抹棹布（食卓拭き）

墨斗（すみつば）

人影（人の影）

瞳

潑雪花 夜合花 梨花 石榴花

紅花

編 者 呉 修喆 (Wu Xiuzhe / ご・しゅうてつ)

1983 年、中国浙江省生まれ。華東師範大学日本語学科卒業。復旦大学中文系文学専攻修士課程在学中、國學院大學文学研究科伝承文学コースに一年交換留学。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。帝京科学大学非常勤講師を経て、現在は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所アソシエイトフェロー。
研究分野は漢字文化史、地域文化研究。

明末日用類書燈謎選集

2023（令和 5）年 2 月 28 日 第 1 版第 1 刷発行

ISBN978-4-86766-000-3 C0098 © 2023 Wu Xiuzhe

発行所 株式会社 文学通信

〒114-0001 東京都北区東十条 1-18-1 東十条ビル 1-101

電話 03-5939-9027 Fax 03-5939-9094

メール info@bungaku-report.com ウェブ <https://bungaku-report.com>

発行人 岡田圭介



ご意見・ご感想はこちら
からも送れます。上記
のQRコードを読み取っ
てください。

※非売品・PDF 版のみ発行